

県立文書館遺跡

県立文書館建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1984年

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	財)群馬県埋藏文化財	0/-353
	調査事業団保管	
NO.	昭和60年8月15日	2/2
60-759		(6)

県立文書館遺跡

県立文書館建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

序

群馬県は、古墳をはじめ各種の埋蔵文化財も多く、これが保存・保護の一環として、県内各地で多くの発掘調査が実施されております。一方、県内各地には、中世・近世以降の貴重な文書類も数多く残され、これら資料の保存・管理の必要性も強く望まれていたところ です。

本冊子で報告する遺跡は、これら文書類を保存・管理する県立文書館建設用地内に存在したもので、用地東半部には、東に隣接してある国指定史跡前橋二子山古墳の周堀が確認され、西半部には掘立柱の建物跡やこれを取り囲む濠等が発見されました。これら調査の結果は、文書館建設の企画、設計へも反映され、古墳周堀の範囲内には建物を配置しない等の方策も講じられ、埋蔵文化財保存への配慮もしていただきました。

遺跡の調査に始まり、整理作業をすすめ、ここに報告書を刊行する運びになりましたのも、関係機関をはじめとする多くの方々の努力と御協力の賜物であります。厚く感謝の意を表します。

本冊子が十分活用され、群馬の歴史を解明していくための一助として生かされていくことを期待し序といたします。

昭和59年11月15日

(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は群馬県立文書館（群馬県前橋市文京町3丁目27番21号所在）建設に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査の報告書である。遺跡名は県立文書館遺跡とした。
2. 本発掘調査は群馬県教育委員会（文化財保護課）及び財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が下記により昭和55年度に実施した。
 - (1)遺構確認調査 期 間 昭和55年5月20日～27日
調査主体 群馬県教育委員会管理部文化財保護課
調査担当 松島 栄治 阿久津宗二 石川正之助 桜場一寿
 河口正史
 - (2)本 調 査 期 間 昭和56年3月9日～3月27日
調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査担当 細野雅男
3. 発掘調査整理作業は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の昭和59年度事業として実施した。
整理担当 伊勢崎市立名和小学校教諭 細野雅男 調査研究員 相京建史
4. 整理作業における図面・遺物整理・写真撮影・木器の保存処理等は下記の者が行なった。
石井弘子 大川明子 鈴木紀子 中山悦子 福島恵理子 茂木順子（以上、図面、遺物整理） 佐藤元彦（写真担当） 関 邦一 宮沢健二（保存処理）
5. 本報告書には調査担当者の了解を得て、群馬県立境高等学校教諭 桜場一寿氏より玉稿を賜わり、遺構確認調査の結果を取録した。
6. 本報告書の執筆者は文末に記載した。
7. 本報告書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行25,000分の1（前橋）地形図と、前橋市発行2,500分の1現形図（昭和54年）である。
8. 遺跡内土層柱状図は群馬県立文書館より提供を受け、一部加筆して記載した。
9. 本遺跡の出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
10. 本報告書の作成にあたり、下記の方から資料提供、助言、協力を賜った。
群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県立文書館、前橋市教育委員会社会教育課
小林起久治 沢井良之助 井上唯雄 近藤平志 白石保三郎 梅沢重昭
大沢秋良 松本浩一 神保侑史 石塚久則 大江正行 飯田陽一
岩崎泰一 新倉明彦 津金沢吉茂 関 晴彦 大木紳一郎 神谷佳明
徳江秀夫 定方隆史 国定 均 笠原秀樹 山本朋子 吉田有光
柳岡良宏
11. 木材の鑑定は金沢大学助教授農学博士鈴木三男、東京大学大学院能城修一両氏による。

凡 例

1. 調査区は一辺5mの方眼によって記録をとることにし、方眼の南北ラインは磁北にあわせ、5m方眼の西北部隅をグリット名とした。東西方向をアルファベット、南北方向を数字であらわし、東西を先に南北を後に呼ぶ。
2. 磁北は方位記号で表わした。
3. 遺構実測図に記した断面基準線の数値は海拔である。
4. 本書に記した遺構実測図は原則として60分の1と80分の1である。
5. 遺構全体図は250分の1とした。
6. 等高線内に入れた数値は海拔である。
7. A軽石は浅間A降下軽石層。B軽石は浅間B降下軽石層を簡略化して使用した。
8. 本書に記した遺物実測図は原則として3分の1であり、板碑は4分の1とした。その他は、図中に付加したスケールを使用されたい。
9. 土器等の遺物実測は4分割法により左2分の1へ外面、右2分の1に断面および内面を記載した。
10. 土器実測等中央線については実線は遺物正置のままの実測図であり、一点鎖線は180°回転させて実測したことを表わす。
11. 土器の拓本は断面の左側に内面を表わし、右側に外面を表わした。
12. 遺物実測図で破線を使用した部分は推定復元部分であるが、出来る限り最小限の復元にとどめた。
13. 遺物実測図中に復元図と記した遺物は実測が不可能であったため、細部の断片を計測して復元した図である。
14. 遺物実測図中に参考図と記して使用した図は未報告資料を借用した。当遺跡出土の遺物を理解しやすくするために使用した。
15. 土器の色調の断定は「標準土色帳」農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色調監修、1976年9月発行を使用した。
16. 二子山古墳としての名称が数基の古墳に命名されているため、ここでは「前橋市史第1巻」に従い「前橋二子山古墳」とした。
17. 文中に出てくるSEは井戸址である。
18. 一図版内で断面基準線が同一レベルの場合、混乱を来たすおそれがあるものは1ヶ所に海拔を記入した。

目 次

第1章 経 過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	2
第2章 環 境	3
第1節 遺跡の位置と環境	3
第2節 周辺の遺跡	6
第3章 遺構確認調査の結果	7
第4章 本調査に至る経過	13
第5章 各 説	17
第1節 柱 列	17
1号柱列	17
2号柱列	17
3号柱列	18
4号柱列	18
第2節 掘立柱建築遺構	19
1号掘立柱建築遺構	19
2号掘立柱建築遺構	21
3号掘立柱建築遺構	21
4号掘立柱建築遺構	23
5号掘立柱建築遺構	23
6号掘立柱建築遺構	23
第3節 漆	25
1号漆	25
2号漆	32
3号漆	36
4号漆	37
第4節 井 戸	39
1号井戸	39
2号井戸	40
3号井戸	40
第5節 土 塚	40
第6章 ま と め	41

挿 図 目 次

Fig. 1	遺跡の位置と環境	3
Fig. 2	遺跡の位置	4
Fig. 3	遺跡内土層柱状図	5
Fig. 4	前橋二子山古墳墳丘図と企画線	10
Fig. 5	確認調査トレンチ土層図	11
Fig. 6	前橋二子山古墳近況実測図	12
Fig. 7	発掘区遺構全体図	15
Fig. 8	1号柱列実測図	17
Fig. 9	2、3号柱列実測図	18
Fig. 10	4号柱列実測図	19
Fig. 11	1、2号掘立柱建築遺構実測図	20
Fig. 12	3号掘立柱建築遺構実測図	21
Fig. 13	4号掘立柱建築遺構実測図	22
Fig. 14	5、6号掘立柱建築遺構実測図	24
Fig. 15	調査区南西1号漆実測図	25
Fig. 16	1号漆土橋跡部分等高線実測図 と遺物出土状況実測図	26
Fig. 17	1号漆南東隅部分等高線実測図 と遺物出土状況実測図	27
Fig. 18	1、2号漆接点周辺実測図	28
Fig. 19	1号漆出土板碑実測図	29
Fig. 20	1号漆出土遺物実測図	30
Fig. 21	1号漆土橋使用杭柱実測図	31
Fig. 22	2、3号漆接点周辺実測図	32
Fig. 23	2号漆出土遺物実測図	33
Fig. 24	2号漆出土遺物実測図	34
Fig. 25	3号漆南東隅等高線実測と 土層図	36
Fig. 26	3号漆出土遺物実測図	37
Fig. 27	1、4号漆等高線実測と土層図	38
Fig. 28	1号井戸実測図	39
Fig. 29	2、3号井戸実測図	39
Fig. 30	土塚実測図	40
付 図	前橋二子山古墳周辺の地図	44

図 版 目 次

- PL. 1 前橋二子山古墳と調査区全景
- PL. 2—1. 確認調査第1トレンチ周堀立ち上がり状況
2. 確認調査第3トレンチ周堀立ち上がり状況
- PL. 3—1. 確認調査第4トレンチ土層堆積状況
2. 確認調査第5トレンチ土層堆積状況
- PL. 4 調査区全景
- PL. 5—1. 1号柱列、1、2号掘立柱建築遺構全景
2. 2、3号柱列、4号掘立柱建築遺構
- PL. 6—1. 4号柱列全景
2. 3号掘立柱建築遺構全景
- PL. 7—1. 4号掘立柱建築遺構
2. 5、6号掘立柱建築遺構全景、4号濠西端部
- PL. 8—1. 6号掘立柱建築遺構全景、4号濠
2. 2、3号井戸、1号濠
- PL. 9—1. 1号濠土橋跡部分
2. 1号濠土橋跡柱出土状況
- PL. 10—1. 1号濠南東隅部遺物出土状況
2. 1、2号濠接点付近の遺物出土状況
- PL. 11—1. 1号濠出土遺物
2. 1号濠出土遺物
3. 1号濠出土遺物
4. 1号濠出土遺物
5. 1号濠出土遺物
- PL. 12—1. 1号濠出土遺物
2. 1号濠出土遺物
3. 1号濠出土遺物
4. 1号濠出土遺物
5. 1号濠出土遺物
6. 1号濠出土遺物
7. 1号濠出土遺物
8. 1号濠土橋柱使用材
9. 1号濠土橋柱使用材
10. 1号濠竹製杓出土状況
- PL. 13—1. 2、3号濠接点付近遺物出土状況
2. 2号濠出土遺物
3. 2号濠出土遺物
4. 2号濠出土遺物
5. 2号濠出土遺物
6. 2号濠出土遺物
7. 2号濠出土遺物
8. 2号濠出土遺物
- PL. 14—1. 2号濠出土遺物
2. 2号濠出土遺物
3. 2号濠出土遺物
4. 2号濠出土遺物
5. 2号濠出土遺物
6. 2号濠出土遺物
7. 2号濠出土遺物
8. 3号濠全景
- PL. 15—1. 3号濠出土遺物
2. 3号濠出土遺物
3. 3号濠出土遺物
4. 1号井戸全景

第1章 経 過

第1節 調査に至る経過

群馬県史編纂の調査過程において、「群馬県に関する歴史的価値のある古文書・記録及び行政文書・行政資料などを収集・整理・保存し、さらにこれらの資料を行政及び県民の利用に供するとともに、有効な活用を図るための調査・研究を行い、県民文化の向上・発展に寄与する」ことを目的として群馬県立文書館（以下「文書館」と称す）が、前橋市文京町に開館したのは昭和57年のことである。文書館の建設地となった地は、県有地で旧しらがね学園跡地であり、文書館建設の時点まで群馬県教育委員会文化財保護課分室として利用されていた。文書館建設地に接しては、前方後円墳の国指定史跡「前橋二子山古墳」が所在しており、さらには、同所付近には前方後円墳の不二山古墳、唐櫃山古墳を始めとする大小の古墳が、数多く分布していたことが知られている。この事は、当然ながら前橋二子山古墳の規模からして、同古墳の周堀が文書館建設地内に及び、文書館建設地が埋蔵文化財包蔵地であることは、十分に予測された。

そこで、文書館建設地が旧しらがね学園に決定し、当該建設事業計画が群馬県教育委員会文化財保護課に協議された昭和55年に、文書館建設地内の埋蔵文化財の保護を講じるべく、埋蔵文化財有無を確認するための調査を行うことになった。遺構確認調査は当初、旧しらがね学園の建物・構造物等の撤去後に実施する予定であったが、諸般の事情により、やむを得ず構造物をさけて実施した。遺構確認調査は群馬県教育委員会が調査主体者となり、群馬県立前橋第二高等学校教諭松島栄治、群馬県教育委員会部長室県史編纂室参事 阿久津宗二、同調査員 石川正之助、同管理課文化財保護課文化財保護主事 桜場一寿、同 洞口正史の各氏を調査担当として、横塚武太郎氏等の協力を得て、昭和55年5月20日より5月27日にかけて行った。その結果、①東接する史跡「前橋二子山古墳」の周堀が文書館建設地内まで及ぶこと、②建設地内南半部分を中心に、南北走向をもつ2条の濠及び8個の柱穴状ピットの存在が確認された。

遺構確認調査に基づいて、文書館建設は本館の建設位置の検討・協議が行われ、本館は前橋二子山古墳の周堀を避けて設計・着工されることとなった。そして、遺構確認調査によって明らかにされた周堀等の遺構の性格を、さらに明らかにするため、文書館建設地全域の発掘調査を実施することとなった。調査は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県教育委員会より委託を受けて、昭和56年3月9日から3月27日の間実施した。調査の結果、以下に報告するところの遺構を明らかにすることができた。

なお、発掘調査に際しては前橋二子山古墳の周堀の性格を明らかにする上で、文書館建設地外の前橋市文京町3丁目313所在の地を、土地所有者横塚武太郎氏のご好意・協力で調査することができ、貴重な資料を得ることができた。ここに銘記しておきたい。（神保信史）

第2節 調査の経過

- 3月9日 月曜日 晴 器材搬入。
- 3月10日 火曜日 晴 遺構確認作業。
- 3月11日 水曜日 晴 遺構確認作業、1号壕写真撮影及び土層実測、1号土壕写真撮影及び土層実測。実測にともなうベンチマークを移動（二子山古墳々頂部三角点より。）
- 3月12日 木曜日 晴 柱穴群の調査。
- 3月13日 金曜日 晴 3号壕調査開始。柱穴群の調査継続。
- 3月14日 土曜日 雨 作業中止。
- 3月16日 月曜日 晴 3号壕調査継続。グリット設定。
- 3月17日 火曜日 晴 2号壕調査開始、写真撮影、土層実測。3号壕調査継続。柱穴群精査後、1～4号掘立柱建築遺構実測。
- 3月18日 水曜日 晴 5・6号掘立柱建築遺構実測。2号壕調査継続。1号壕東側範囲確認トレンチ調査中焼夷弾を発見、前橋東警察署の不発弾係2名によりとり上げ処理。
- 3月19日 木曜日 晴 1号柱列実測。1～6号掘立柱建築遺構写真撮影。1・3号壕写真撮影。
- 3月20日 金曜日 晴 1・3号壕実測終了後遺物とり上げ作業にうつる。
- 3月23日 月曜日 晴 2号壕調査。1・2号掘立柱建築遺構エレベーション実測。
- 3月24日 火曜日 晴 3・4号壕調査。4号掘立柱建築遺構エレベーション実測。
- 3月25日 水曜日 雨 作業中止。
- 3月26日 木曜日 晴 4号壕調査継続、併行して土層実測、遺物とり上げを行う。
- 3月27日 金曜日 晴 1・2・4号掘立柱建築遺構写真撮影、2号壕全景写真撮影終了、1号壕調査。とり上遺物の整理作業。
- 3月28日 土曜日 晴 器材整理。図面整理。本日をもって発掘調査終了。

第2章 環 境

第1節 遺跡の位置と環境

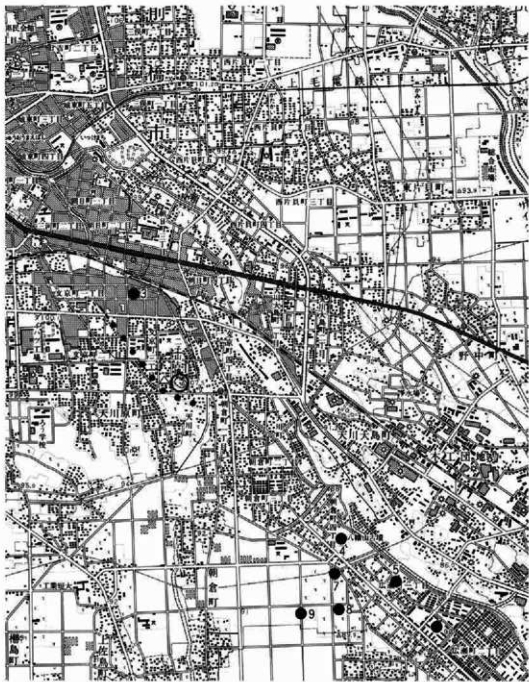


Fig.1、遺跡の位置と環境 (国土地理院発行 25,000分の1)

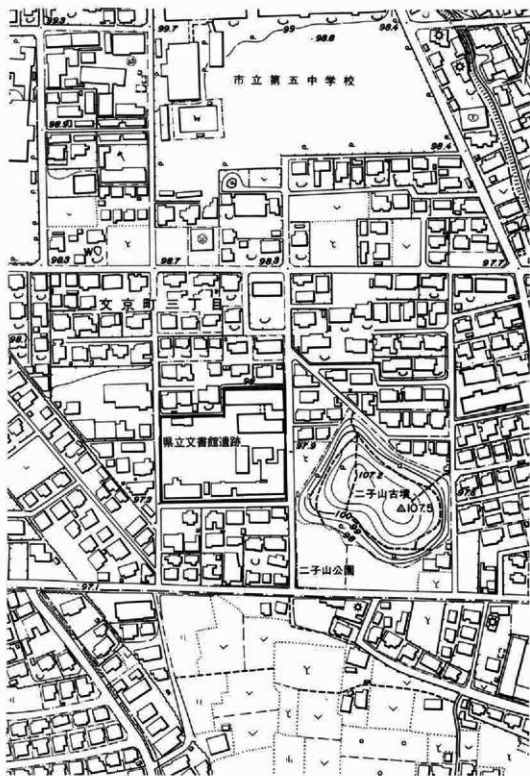


Fig. 2、遺跡の位置 (前橋市現形図 2,500分の1)

県立文書館建設に伴う当遺跡は両毛線前橋駅南東約1.5km、国指定史跡の前橋二子山古墳の周堀が重なる地点に位置する。当所は広瀬川低地帯、かつて南東流する利根川、現在の広瀬川右岸の前橋台地上にあり周辺には現在学校や住宅が立ちならぶ中にも遺跡の南側には水田や畑が見られる。

遺跡の東側約250m離れて南流する棚島用水がある。棚島用水は端気川からの分水を文京町3丁目に取り入れを行ない、天川原、六供、上佐鳥を経て棚島町に流入2分流して利根川に合流する。端気川は広瀬川と朝日町1丁目の十六本橋で分かれ、南東流し、文京町から天川町で南流し、利根川に合流する下川湖までの9kmには多くの堰があり、前橋地区南部の農耕地帯の重要な用水となっている。

前橋台地の東端部に位置する遺跡は海拔約97~98m、地質は榛名山火砕流、火山灰の優勢層であり所々に礫が混じる比較的軟弱な地盤である。深度は地表下18~19mに相馬が原扇状地礫層相当層の砂礫があり、この層が前橋台地の支持層となっている。ボーリングデータから地質柱状図を作成してみると (Fig. 3)、前橋台地支持層の直上に暗茶灰色のシルト層がある。この土層は始良火山灰 (Ai) として報告されている。地表下約7~8m下位から下方では緊硬密度は密の状況を示している。表土層から地表下約7~8mまでの間は軟質と中質な状況を示しており、一定状況での安定度は低いことが観察される。自然水位の測定データは地表下約5mで確認されている。

(相京建史)



Fig. 3、遺跡内土層柱状図

第2節 周辺の遺跡 (Fig.1)

1. 前橋二子山古墳 前橋市文京町3丁目26 (昭和58、59年度保存修理^{注1})
2. 女 溝 前橋市文京町1・2・3丁目
3. 不二山古墳 前橋市文京町3丁目2
4. 八幡山古墳 前橋市朝倉町4丁目9-3
5. 天神山古墳 前橋市広瀬町1丁目27-7
6. 飯玉神社古墳 前橋市広瀬町2丁目
7. 後閑団地遺跡^{注2} 前橋市後閑町1番1外8筆
8. 後閑II遺跡^{注3} 前橋市後閑町35番地外5筆
9. 天神小学校建設に伴う確認調査^{注4} 前橋市後閑町50番地の一他

1. は当調査の前方部周堀の一部が確認された。当古墳の記載は第3章であつている。

2. は当古墳の北西から南側を溝跡の痕跡がある。これは『前橋風土記』^{注5}に「天川原双子山の北、および岩神原に女溝があり、本来つながっていたのが、その中間が農耕によって断たれた。」と貞享元年(1684)古市剛の編撰にある。この女溝は『前橋市史』^{注7}にある「遺構は文京町1、2丁目に一部現存。」と記されている部分や、御絵図東通り天川村、安政6己未年(1859)2月、(付図)にも同溝に比定すべき場所が確認できる。

3. は前方後円墳、全長50m、横穴式石室、甕石をもつ。埴輪、直刀、耳環、飾金具等出土。

4. は国指定史跡、前方後円墳、全長130m、前方部幅59m、高さ8m、後方部径72m、高さ12m、甕石有り、周堀の深さは約50cm、主体部は不明。

5. は県指定史跡、前方後円墳、全長129m、前方部巾168m、高さ7m、後円部径75m、高さ9m、粘土槨、舶載鏡5面、茶環頭大刀1、銅鏡30、鉄斧2、紡錘車4等出土、四世紀後半に築造。

6. は飯玉神社古墳(上川洞97号墳)、円墳、径30m、川原石使用の甕石。

7. 8. 9は、昭和57、58年に調査が行なわれた遺跡である。7は古墳時代(石田川期)の住居址5、石塚墓1、土壇1、溝状遺構5、奈良平安時代の住居址(園分期)12、井戸址1、B経石下の溝5などがある。8は古墳時代から中世にかけての住居址22、土壇3、溝30、平安時代の水田跡、中世掘立柱建築跡2がある。 (相京建史)

注1 昭和58年度文化財調査報告書 第14集 昭和58年3月 前橋市教育委員会

2 昭和57年度文化財調査報告書 第13集 昭和58年3月 前橋市教育委員会

3 注1に同じ

4 注2に同じ

5 群馬県史料集 第1巻 風土記論Ⅰ 昭和42年7月 群馬県文化事業振興会

6 上野国郡村誌4 群馬郡(1) 昭和56年2月 群馬県文化事業振興会

7 前橋市史 第1巻 昭和46年2月 前橋市

第3章 遺構確認調査の結果

前橋二子山古墳周堀

前橋二子山古墳に係る遺構は、遺構確認調査で設定した第1・第3トレンチ及び、文化財分室に東接する桑畑に設定した第4・第5トレンチで認められた前方部前面の周堀である。

調査は時間的制約と建物間をぬっての小範囲のものであり、遺構の状態が悪いこともあってその全貌を明らかにしたとはいえないが、各トレンチの状況と古墳の位置とを検討することによって、ある程度の傾向を指摘することが出来る。以下、各トレンチで認められた前橋二子山古墳周堀について述べる。(Fig.5・Fig.7)

土層説明

- 1層 攪乱層。表土。
- 2層 黒褐色土層。ローム層直上に自然堆積する安定した緻密な土層。ローム層とは漸移的に移行する。
- 3層 暗褐色砂質土層。古墳周堀内に主体的に堆積する。浅間B降下軽石を多量に含む。
- 4層 淡褐色粘質土層。緻密な粒子のブロック堆積土。周堀内に堆積する。
- 5層 黒灰褐色粘性土層。3層と8層の混土層。周堀堆積土。
- 6層 淡灰褐色粘土層。周堀底面近くに堆積。
- 7層 暗褐色粘土層。周堀底面に堆積。
- 8層 ローム層。基盤層。

第1トレンチは古墳前方部前面中央付近から墳丘主軸に対し、約30度ほど西に偏して設定した。建物跡地の為、地表から0.6mほどは攪乱されていたが、トレンチ東半部分はその直下層に浅間B降下軽石を多量に含む3層があり、その下層は8層であることがわかった。3層と8層との境界は平坦かつ明確であり、8層が人為的に削られた上に3層が堆積したことがわかる。また、8層は西へわずかに浅くなる傾向が認められる。3層はトレンチ基点から10mほどのところで立ち上がり、その下層に2層が堆積する。この層は8層から漸移的に変化しており、第2、第3トレンチでも周堀外方に普遍的に堆積していることから、自然堆積土であることがわかった。

このことから、3層は前橋二子山古墳の周堀堆積土であり、これの堆積する範囲が周堀の範囲と一致することが想定された。周堀立ち上がり部は下端と上端の差が0.18mしかない。これは上方が攪乱によって削られていることもあるが、周堀そのものの掘り込みも、その外縁近くでは8層をわずかに削り込む程度の浅いものであったためと思われる。立ち上がり位置は現況の墳丘前方部前端から35mである。

第3トレンチは第1トレンチと平行させ、南方20mの距離に設定した。トレンチ基点から西方

5 mまでは、1号濠によって攪乱されているが、幸いにもわずかにはずれた位置で3層（周堀堆積土）の立ち上がりが認められた。この部分の層序は第1トレンチのそれとよく似ており、立ち上がり部西方は8層上に2層が堆積する。確認部での立ち上がり高は0.37mであり、8層を0.3m掘り込んでいる。上方が第1トレンチと同じく攪乱されているため、立ち上がりの状況は明らかではないが、下半の形状からみると、かなりな急傾斜であったと考えられる。立ち上がり部下端での第1トレンチとの比高は第3トレンチの方が0.37m低い。

第4トレンチと第5トレンチは、第1トレンチで認められた古墳周堀がどのような断面形状をもつのかを把握するため、古墳主軸線にはば沿った位置に設定したものである。

墳丘裾から6mの位置に設定した第4トレンチでの周堀底面は、第1トレンチ立ち上がり部底面より0.5m深く、その西方11mに設定した第5トレンチは第4トレンチと第1トレンチの中間のレベルを示している。これら3ヶ所のレベルを図上で検討した結果、底面は平坦でかつ外方へ浅くなるのがわかった。第4トレンチの堆積土は、底面を構成する8層の上に7層、6層、5層、の順で数cmずつの堆積が認められ、その上層は第1、第3トレンチ周堀堆積土の3層が厚く堆積する。しかし第5トレンチでは第4トレンチで認められた下位の6・7層がなく、ローム層

前橋二子山古墳前方部周堀計測表

ト レ ン チ	外縁位置 [※]	外 縁 レ ベ ル ^{※※}		周 堀 レ ベ ル [※]		備 考
		上 端 ^{※※※}	下 端	位 置	レ ベ ル	
		1	35.0	96.98	96.80	
2	—	—	—	—	—	周堀外方に設置
3	35.0	96.80	96.43	—	—	
4	—	—	—	6.0	96.30	
5	—	—	—	17.0	96.58	

※ 外縁位置、周堀レベルの位置は、前方部前縁線からの距離である。
 ※※ レベルは標高である。
 ※※※ 外縁上端レベルは、現況の確認レベルである。

前橋二子山古墳計測表

部 単 位	全長	墳				丘				周堀	主軸方位		
		後 円 部 径	前 方 部 高	前 方 部 幅	後 円 部 高	く び れ 部 幅	基 壇 高		基壇幅			前方部直面積	
							前方部	後円部					
m	104	72	11	87	9.5	62	4.5	5.32	3-4.5	4内外	35	N-55°-W	
35m尺	297.1	205.7	31.4	248.6	—	—	—	—	—	—	11.4	100	—
企圖尺	300	200	—	250	—	—	—	—	—	—	100	—	—

上には5層が数cmの厚さで直接堆積しており、その上層に3層が堆積している状況であった。

以上の結果から前橋二子山古墳の周堀の規模、形状を検討することにする。

前橋二子山古墳は全長約104mの後期前方後円墳であり、くびれのゆるい2段築成墳である。未調査であるが、墳丘面には墓石が露出し、これに榛名山噴出の角閃石安山岩転石が認められる。6世紀末の築造になるものと考えられ、

広瀬川右岸の朝倉古墳群における当該期の盟主的存在である。現状では周堀の痕跡は不明である。墳丘の正確な計測値は発掘調査によって確かめる必要が

あるが、遺存状態から見て、現状での数値も原形とさほどの差は生じないものと考えられる。^{注2}

平面の形状は墳丘主軸長に対し、前方部幅、後円部径とも比較的大きい。全長104mは、発掘調査で確かめられた前方部前面の周堀幅35mの約3倍である。また後円部径72mは2倍の70mに近い。いまこの数値を根拠に墳丘実測図に次のような操作を試みた。まず後円部に径72mの円を描く。その中点(O)は主軸線上にある。この円と接して、前方部に同一の円を描く。この円の中点(Q)は主軸線上の前方部前端部に位置することになる。またこの円弧は前方部周堀外縁(X)と円Oと接する(P)ことになる。以上の操作によって周堀前方部外縁、前方部前端、後円部の位置が設定されたことになる。前方部前端幅は87mである。主軸と前方部周堀外縁の交点Xから両隅部(Y, Y')へコンパスをあてると、その距離は55m内外となる。同じ方法でP点からY, Y'へあてた数値もこれに近い。また前方部側線は中点をPとし、後円部と同一の円を描き、これと円Oとの交点ZおよびZ'とY, Y'を結んだ線が合致しそうである。

以上のことから、前橋二子山古墳はかなり厳密な企画によって築造されていることがわかる。そして用いられた企画寸法は35cmを単位とする高麗尺が墳丘各計測値に適合し、これの使用の可能性の-highいことがうかがわれる。ちなみに墳丘各部位は、全長300尺、後円部径200尺、前方部前端幅250尺、前方部前面周堀幅100尺が想定される。

このことから発掘調査で確認された周堀外縁は古墳築造にあたって墳丘と同一企画のもとに設計されたことがわかる。

周堀は墳裾部が深く、外方へしだいに浅くなる形状で、底面はほぼ平坦であったと思われる。ただ、第1トレンチより、その南方20mの第3トレンチの方が外縁部周堀底が0.37m深くなっている。この傾向は自然地形の傾斜よりもやや大きいようである。また第4トレンチでは湛水によって形成されたと考えられる粘土層が堆積しているが、第5トレンチ西方では認められない。もし仮りにこのレベル差が北方から南方への傾斜として周堀全体に認められるものだとすると、周堀が機能していた期間においても、その全面が湛水していたというより、その一部がわずかに水をたたえおり、北半は空堀であったと考えた方がよさそうである。ここでは可能性を指摘するに留め詳細は将来の調査にまらたい。

また、外堀の存在の有無であるが、少なくとも試掘の第1、第2、第3トレンチにおいては内堀外方32mまで延長したが、その存在は認められなかった。(桜場一寿)

注1 前橋二子山古墳墳丘実測図は前橋市教育委員会より提供を受けた。

注2 尾崎富左衛門「前橋二子山古墳」『前橋市史 第1巻』1971

注3 梅沢重昭「毛野の古墳の承襲」『考古学ジャーナル150』1978 本項では、梅沢重昭氏による2つの同規模円による想定企画の手法を採用した。

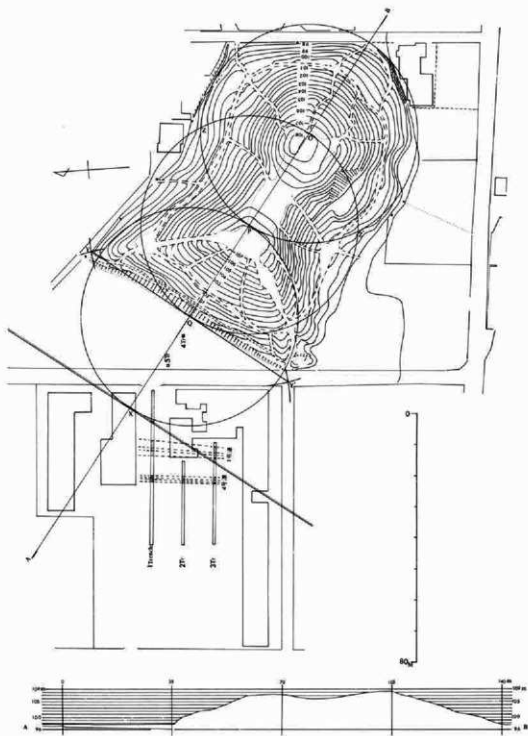


Fig. 4、前橋二子山古墳墳丘圖と企画線

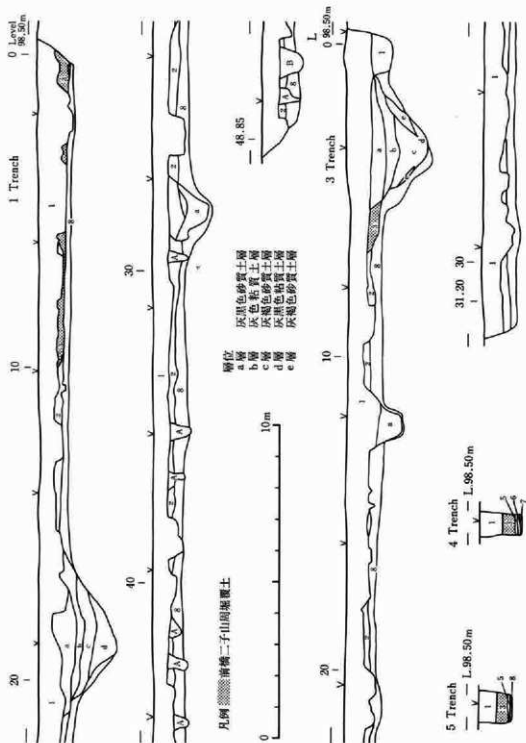
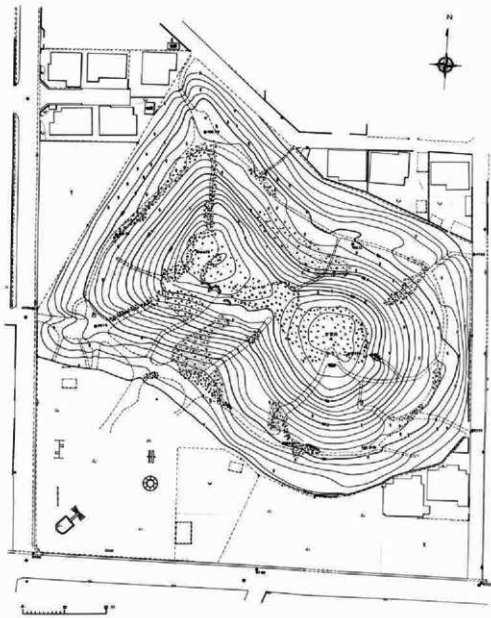


Fig. 5、確認調査トレンチ土層図



凡例	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	

(前橋市教育委員会提供)

Fig. 6、前橋二子山古墳近況実測図

第4章 本調査に至る経過

県立文書館遺跡の埋蔵文化財発掘調査は、群馬県教育委員会管理部文化財保護課が実施した遺構確認調査の結果をふまえて、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施したものである。

遺構確認調査の結果では、県立文書館建設予定地内の北東から南にかけて、国指定史跡である前橋二子山古墳の周堀が確認され、更に、トレンチ内で掘立柱建築遺構及び濠が確認されている。

遺構確認調査により確認された前橋二子山古墳の周堀区域は、史跡指定区域と一体のものとして理解されるもので、現状保存をはかる必要があり、開発行為の及ばぬことが望ましいことである。又トレンチ内で確認された掘立柱建築遺構及び濠についても、現状保存をはかることが望ましいわけであるが、それが不可能な場合は県立文書館建設計画に先立ち、遺構の範囲及び性格についての調査の必要性が認められるものである。従って、県立文書館の建設計画にあたり、建造物の建設は古墳の周堀を避け、遺跡の破壊を最小限にとどめることとなった。しかし、掘立柱建築遺構及び濠については、県立文書館の建設上、全面的な保存対策をとることが出来ず、建造物の建設地区内の本調査を実施するに至った。

本調査の実施にあたっては、県教委が実施した遺構確認調査により、前橋二子山古墳の周堀の存在が明らかにされているため、周堀の保存を最優先することとした。前橋二子山古墳の周堀及び建造物の建設予定地内の調査により、濠、掘立柱建築遺構、柱列等が検出され、これらが一体の遺構としてとらえられるため、濠の確認を目的として、県立文書館建設予定地内にトレンチを設定した。その結果、濠、掘立柱建築遺構、柱列、井戸を備えた居館跡であることが推定され、南東部4分の1が検出されたと想定される。従って、濠が延びる西及び北の区域は未調査であるため、この区域の調査を実施すれば、本遺構の全貌が明らかになるとともに、その性格も解明されるものである。尚、この遺構については、地元の伝承や文献等に表われておらず、本調査により当地域の歴史の解明に一助をなすものとなった。

調査を行なった結果は次の通りである。柱列が4列、掘立柱建築遺構が6棟、濠が4条、井戸が3基、土城が1基と前橋二子山古墳周堀が検出された。(Fig. 7 発掘区遺構全体図)

1. 柱 列

4例の柱列が検出された。いずれも本調査区での検出であり、規模は次の通りである。

1号柱列—柱間3間、主軸方位N-85°-W

2号柱列—柱間3間、主軸方位N-87°-E

3号柱列—柱間5間、主軸方位N-82°-E

4号柱列—柱間7間、主軸方位N-3°-W

2. 掘立柱建築遺構

6棟の掘立柱建築遺構が検出された。いずれも本調査区での検出であり、規模は以下の通り。

- 1号掘立柱建築遺構—梁間5間(4間)、桁行1間、主軸方位N—87°—W
 2号掘立柱建築遺構—梁間4間(3間)、桁行1間、主軸方位N—88°—W
 3号掘立柱建築遺構—梁間2間、桁行1間、主軸方位N—86°—W
 4号掘立柱建築遺構—梁間5間? 桁行1間、主軸方位N—83°—W
 5号掘立柱建築遺構—梁間3間(4間)、桁行3間(推定4間)、総柱建物、主軸方位N—3°—E
 6号掘立柱建築遺構—梁間3間、桁行2間(推定3間)、総柱建物、主軸方位N—3°—E

3. 濠

- 1号濠—遺構確認調査の1・2トレンチにおいて確認された。本調査では前橋二子山古墳の周堀は保存処置を考慮し、建設予定地を西にずらし調査を行なったところ、遺構確認調査時に検出された濠と同一形態の遺構を検出したため、同遺構の東南隅を確認すべくトレンチを入れた。この結果、1号濠は前橋二子山古墳の周堀を切っていることが明確となった。出土遺物は中世陶器、かわらけ、漆器碗、竹製杓、板碑などがある。
- 2号濠—遺構確認調査では未確認であったが、3号濠の北限を検出するためトレンチを延ばした結果、東西走向をもつ2号濠が検出された。3地点で2号濠を確認し、A・B—0区において南北走向をもつ1号濠に結合することが明確となった。出土遺物は、かわらけ、内耳鍋、木製品、石鉢などがある。
- 3号濠—調査区西端で南北走向が主に検出され、B—5区で西側に直角に曲がり、西側調査区域外に延びることが本調査で確認できた。A・B—0区で2号濠に結合する。3号濠東側には濠に沿うように4号柱列が並ぶ。出土遺物は、かわらけ、硯などがある。
- 4号濠—確認調査の結果、1・2・3トレンチにおいて検出された。南北走向をもつ濠は、本調査において東西走向の濠D—F—5・6区で検出された形態が類似することからG—K—5・6区にトレンチを入れた結果、同一の濠となることが判明した。出土遺物はない。

4. 井戸

- 3基の井戸が検出された。いずれも本調査区での検出であり、形状は次の通りである。
- 1号井戸—円形プラン
 2号井戸—円形プラン
 3号井戸—円形プラン

5. 土 塹

- 1基の土塹が検出された。本調査区での検出であり、隅丸長方形で主軸方位N—89°—Wである。

6. 前橋二子山古墳周堀は、遺構確認調査で1・3トレンチで確認された。また本調査においても1・4号濠の範囲確認トレンチでも明らかになった。周堀の確認できたものはL—1、1—5・6区である。
 (細野雅男)

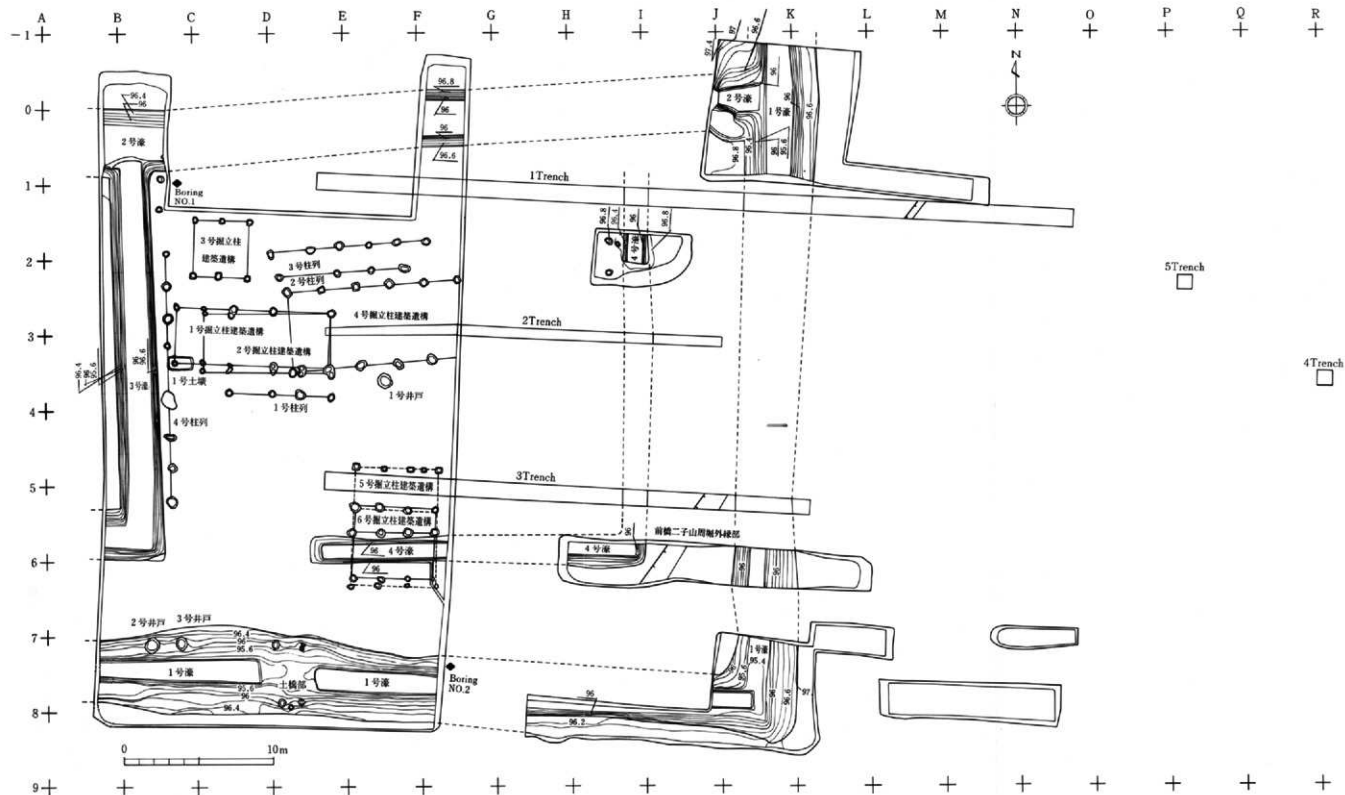


Fig. 7. 尧地区遗址全图

第5章 各 説

第1節 柱 列

1号柱列 (Fig. 8, P.L. 5-1)

1号柱列はグリット名C・D・E-3区に広がりを持ち、1・2号掘立柱建築遺構の南に位置し、ほぼ平行に並び、柱穴が4個検出された。主軸方位はN-85°-Wで柱間は2.87m-1.92m-2.10mである。各々の柱穴についてみると、柱穴1は円形プランをもち、上端径55cm、下端径28cm、深さ60cm。柱穴2はほぼ円形プランで、上端が45cm×50cm、下端は30cm×37cm、深さ37cm、柱穴3は不整形プランで、上端が60cm×70cm、下端が42cm×52cm、深さ48cm、柱穴4はほぼ長円形を呈し、上端が32cm×54cm、下端が27cm×36cm、深さ36cmを測る。いずれの柱穴も素掘りで上端がやや広く、下端がややせばまり、底面はやや丸みをおびている。柱穴と柱穴との間隔は柱穴1と柱穴2が他のそれよりも広く、全体的に不揃いである。

検出された4個の柱穴は、掘立柱建築遺構の柱穴と対応する位置にあり、1号柱列の北に位置する掘立柱建築遺構と一連をなす遺構とも考えられる。

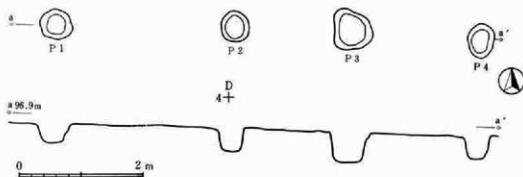


Fig. 8、1号柱列実測図

2号柱列 (Fig. 9, P.L. 5-2)

2号柱列はグリット名D・E-2区に広がりを持ち、4号掘立柱建築遺構の北、約1.10mに位置し、4号掘立柱建築遺構にはほぼ平行している。柱穴は4個検出され、4号掘立柱建築遺構の柱穴のはは中間に配置されているかの如きである。主軸方位はN-87°-Eで柱間は西から各々3.85m-2.30m-2.32mである。各々の柱穴についてみると、柱穴1は円形プランをもち、上端48cm×53cm、下端26cm×31cm、深さ38cm、柱穴2は円形プランで上端38cm×51cm、下端26cm×28cm、深さ37cm、柱穴3は円形で上端約43cm×47cm、下端25cm×30cm、深さ42cm、柱穴4は楕円形プラン

ンで上端47cm×78cm、下端29cm×50cm、深さ51cmである。柱穴1、2、3、は平面、径、深さがともにはほぼ同じであるが、柱穴4のみが、異なっている。

3号柱列 (Fig. 9, P.L. 5-2)

3号柱列はグリット名D・E・F-1に広がりを持ち、4号掘立柱建築遺構及び2号柱列の北にはほぼ平行し、2号柱列の北、約1.70mに位置する。柱穴は6個検出され、主軸方位はN-82°-E。柱間は、東から2.03m-1.88m-2.03m-1.93m-2.68mである。各々の柱穴の計測値は、柱穴1が上端48cm×55cm、下端34cm×37cm、深さ47cm、柱穴2が上端44cm×57cm、下端30cm×35cm、深さ38cm、柱穴3が上端38cm×42cm、下端28cm×29cm、深さ48cm、柱穴4が上端55cm×63cm、下端38cm×40cm、深さ46cm、柱穴5が上端は不明、下端31cm×46cm、深さ48cm、柱穴6が上端43cm×59cm、下端27cm×40cm、深さ55cmである。プランは柱穴1、2、3、4が円形、6が楕円形、5は擾乱を受けている為、不明である。

4号柱列 (Fig.10, P.L. 6-1)

4号柱列はグリット名B-

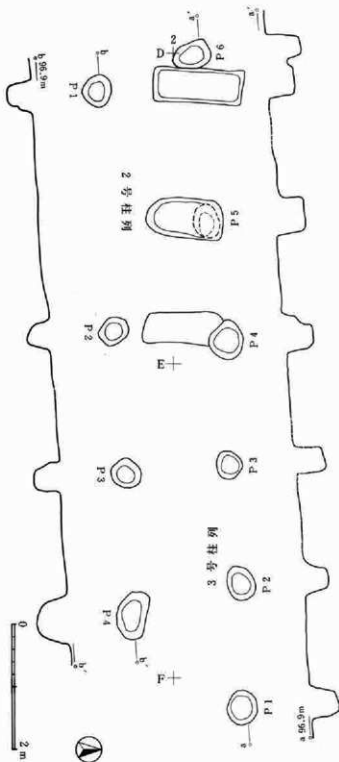


Fig. 9、2・3号柱列実測図

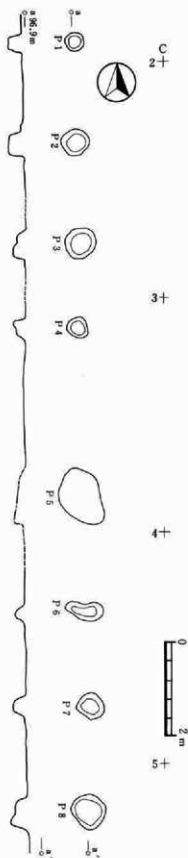


Fig. 10. 4号柱列実測図

1・2・3・4・5区に広がりを持ち、3号濠の東側、約0.7mで平行に位置し、あたかも3号濠に関係する遺構の如くである。主軸方位は $N-3^{\circ}-W$ で検出された柱穴は8個である。柱間は北から2.14m—2.18m—1.80m—3.60m—2.50m—1.96m—2.34mである。各々の柱穴の形状は、柱穴1は円形プランで、上端40cm×42cm、下端22cm×26cm、深さ30cm、柱穴2は円形プランで、上端58cm×64cm、下端38cm×42cm、深さ34cm、柱穴3は円形プランで、上端64cm×66cm、下端42cm×48cm、深さ26cm、柱穴4はほぼ円形プランで、上端42cm×44cm、下端30cm×32cm、深さ22cm、柱穴5は不整形プランで、上端88cm×130cm、深さ22cm、柱穴6は不整形プランで、上端38cm×82cm、下端20cm×56cm、深さ22cm、柱穴7は円形プランで、上端58cm×60cm、下端36cm×41cm、深さ26cm、柱穴8は円形プランで、上端78cm×78cm、下端50cm×60cm、深さ42cmである。柱穴5は他の柱穴と形状を異にする。本遺構の北に柱穴が2個検出されたが、本遺構との関係は不明である。

第2節 掘立柱建築遺構

1号掘立柱建築遺構 (Fig.11, PL.5-1)

1号掘立柱建築遺構はB・C・D-2・3区に広がりを持ち、2号掘立柱建築遺構と重複する。当遺構は3号濠及び4号柱列の東で、1号柱列の北に位置する。主軸方位は $N-87^{\circ}-W$ で桁行1間、梁間は北側で4間、南側で5間で、3.70m及び10.30mである。柱間の寸法は、桁行3.70mで梁間は北側で3.84m—2.60m—2.02m—1.84m、南側で1.88m—1.90m—2.84m—1.80m—1.88mである。柱穴は円形プランをもち、大きさは30cm—64cm、深さは28cm—52cmである。北東隅の柱穴とその西の柱穴は2号掘立柱建築遺構の柱穴と重複しており、又他の柱穴も部分的に重複の傾向がある。南側の梁間は5間であり、北側にはそれに対応する柱穴は未検出である。梁間の中央部がやや広く、これを中心としたほぼ左右対称の遺構である。

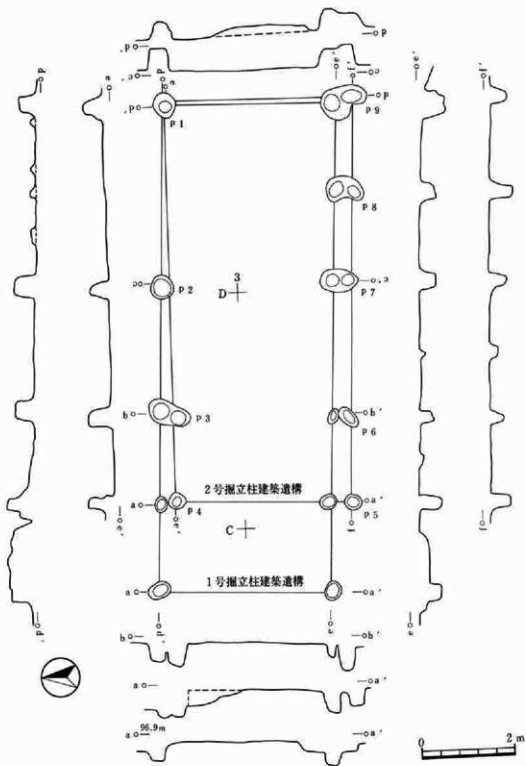


Fig. 11. 1·2号掘立柱建筑遗址实测图

2号掘立柱建築遺構 (Fig.11, P.L.5-1)

2号掘立柱建築遺構はC・D-2・3区に広がりを持ち、1号掘立柱建築遺構と重複する形で検出された。主軸方位はN-88°-Wで、桁行1間、梁間は北側で3間、南側で4間で、3.68m及び8.62mである。柱間の寸法は梁間が北側で4.02m-2.76m-1.84m、南側で2.04m-1.86m-2.90m-1.82mである。1号と重複した柱穴があり、他にも部分的に重複した箇所がある。南側の柱穴は、1号よりも0.40m南に位置し、北側の柱穴は北側隅は重複しているが、西では0.38m南に位置している。梁間は南側で4間であるが、北側では南側に対応する柱穴が1つ未検出であり、これは1号掘立柱建築遺構とも共通したものである。又上記の計測値が示すように中央部の梁間が広くなっている。各々の柱穴の形状は下記の如くである。柱穴1が上端48cm×54cm、下端22cm×26cm、深さ42cm、柱穴2が上端52cm×56cm、下端38cm×38cm、深さ42cm、柱穴3が上端38cm×38cm、下端30cm×32cm、深さ54cm、柱穴4が上端34cm×40cm、下端16cm×20cm、深さ56cm、柱穴5が上端33cm×38cm、下端22cm×23cm、深さ42cm、柱穴6が上端24cm×52cm、下端18cm×36cm、深さ30cm、柱穴7が上端50cm×42cm、下端22cm×24cm、深さ38cm、柱穴8が上端42cm×40cm、下端20cm×28cm、深さ52cm、柱穴9が上端40cm×56cm、下端23cm×42cm、深さ38cmで、概ね円形プランである。

3号掘立柱建築遺構 (Fig.12, P.L.6-2)

3号掘立柱建築遺構は、B・C-1・2区、3号濠の東に位置する。北への広がりには調査区域外へ延びるため未確認である。主軸方位、N-86°-W。桁行1間、梁間2間で、3.66m及び3.60mであり、柱間の寸法は梁間が1.80m-1.80mである。柱穴は方形プランをもち、規模は33cm×36cm-47cm×53cm、深さは26cm-43cmである。

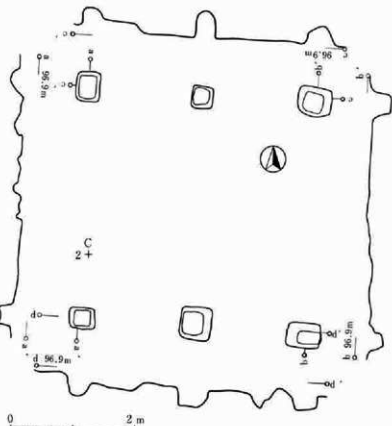


Fig. 12. 3号掘立柱建築遺構実測図

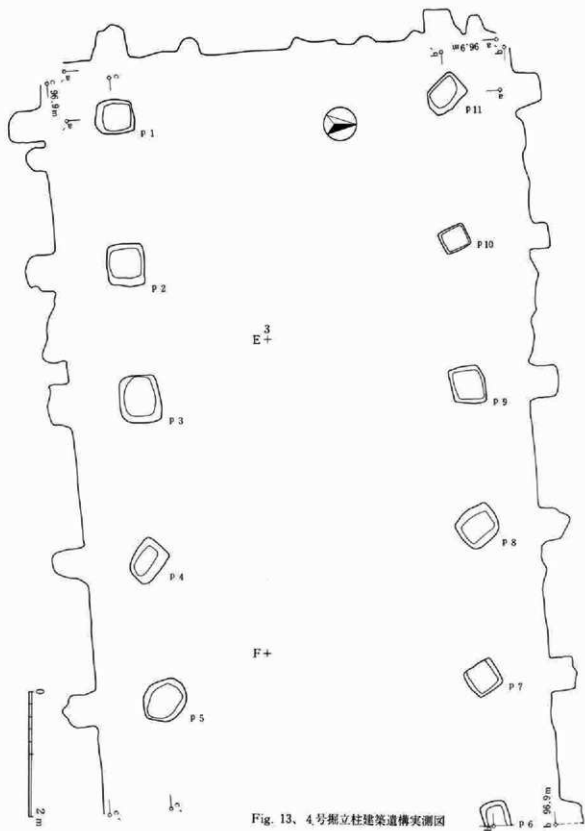


Fig. 13. 4号据立柱建筑道槽实测图

4号掘立柱建築遺構 (Fig.13, P.L.7-1)

4号掘立柱建築遺構は、D・E・F-2・3区に広がりを持ち、東側は調査区域外に延びると思われる。2号柱列、3号柱列の南で、両遺構とはほぼ平行な位置に検出された。主軸方位はN-83°-Eで桁行1間、梁間5間以上であり、5.15m及び11.50mである。柱間の寸法は梁間が2.36m-2.36m-2.30m-2.37m-?mである。柱穴の形状は、柱穴1が上端55cm×60cm、下端42cm×44cm、深さ57cm、柱穴2が上端60cm×69cm、下端42cm×50cm、深さ48cm、柱穴3が上端58cm×76cm、下端48cm×63cm、深さ34cm、柱穴4が上端48cm×63cm、下端24cm×48cm、深さ52cm、柱穴5が上端64cm×73cm、下端45cm×60cm、深さ56cm、柱穴6が上端42cm×1cm、下端28cm×1cm、深さ40cm、柱穴7が上端49cm×52cm、下端37cm×42cm、深さ42cm、柱穴8が上端62cm×66cm、下端35cm×48cm、深さ50cm、柱穴9が上端55cm×60cm、下端43cm×45cm、深さ47cm、柱穴10が上端40cm×45cm、下端32cm×37cm、深さ32cm、柱穴11が上端47cm×63cm、下端32cm×60cm、深さ39cmで、柱穴5は円形プラン、他は方形プランである。

5号掘立柱建築遺構 (Fig.14, P.L.7-2)

5号掘立柱建築遺構は、E・F-4・5・6区に広がりを持ち、1号濠の土橋跡の北東、及び4号濠にまたがった区域に位置し、6号掘立柱建築遺構と重複した形をとっている。主軸方位はN-3°-Eで、桁行3間、梁間3間、7.72m-7.76m及び5.50m-5.52mの総柱建物である。柱間の寸法は梁間が、南側1.72m-2.00m-1.82m、北側1.88m-1.76m-0.90m-1.00m、桁行が、3.48m-1.80m-2.48mである。4号濠により柱穴が攪乱を受けた可能性がある為、推定復元すると梁間が4間となり、柱間の寸法は1.74m-1.74m-1.80m-2.48mとなる。柱穴の形状は円形プランをもち、規模は28cm×36cm-62cm×68cm、深さ28cm-42cmである。又、方形プランをもつ5個の柱穴は北側に位置している。

6号掘立柱建築遺構 (Fig.14, P.L.8-1)

6号掘立柱建築遺構は、E・F-5・6区に広がりを持ち、5号掘立柱建築遺構と重複している。主軸方位はN-3°-Eで、東西に長い形状を呈す。現状では桁行2間、梁間3間の総柱建物で、寸法は4.41m×5.32mである。本遺構は5号掘立柱建築遺構同様、4号濠により攪乱を受けた可能性がある為、これを推定復元すると、桁行3間×梁間3間の東西に長い形状の総柱建物となる。柱間の寸法は、現状では桁行2.92m-1.49m、梁間1.86m-1.78m-1.68mで、これを推定復元すると桁行が1.46m-1.46m-1.49mとなる。柱穴5-柱穴12は5号掘立柱建築遺構と重複し、形状及び規模は、42cm×48cm-62cm×68cmで円形プランをもつ。柱穴1-柱穴4は5号掘立柱建築遺構の南端の柱穴の北、約0.55mに位置し、それに平行した形をとり、規模36cm×40cm-42cm×43cmで円形プランをもっている。

(細野雅男)

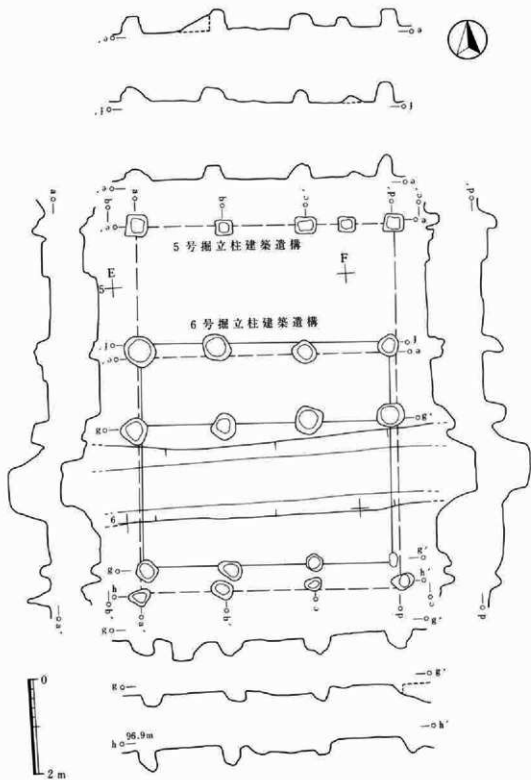


Fig. 14、5・6号掘立柱建筑遺構実測図

第3節 濠

1号濠 (Fig.15・16・17・18, P.L.8-2・9-1・2・10-1・2)

1号濠は、A-7, B-6-8, C-6-8, D-6-8, E-7-8, F-7-8, G-7-8, H-7-8, I-7-8, J-1-0・5-8, K-1-0区に存在する。調査区内の南端と東に位置し、走向方位は南端で $E-4^{\circ}-S$ 、調査範囲外は確認調査のみにとどめたが、J-7区で屈曲、北上し、その走向方位は $N-3^{\circ}-E$ である。調査及び確認調査範囲内においての規模は、東西走向で長さ約39.10m、南北走向で長さ43.80mである。A-7区で上端4.10m、下端1.05m、深さ1.55m、F-7-8区で上端4.52m、下端1.31m、J-7区で上端4.05m、下端1.43m、J-0区で上端4.52m、下端1.55mである。

掘り方は二段に掘られており、外側(南側)の法面は上段が約 40° の傾斜、下段は約 65° の傾斜をなし、内側(北側)の法面は上段が約 45° 、下段も約 45° の傾斜で、幅約0.40mの中段をもつ。

B・C・D-6区では、濠の幅が他よりも広く最大幅で5.95mを測り、濠の底部に長さ約3.50m、幅約1.50mの高まりが見られる。この高まりの南北の法面から7個の柱穴が検出され、南側の法面の柱穴(P1-P3)は三角形に配置され、柱穴1と柱穴3が濠にはほぼ平行に、柱穴2は両柱穴の中央よりやや西寄り、かつ南に位置している。柱穴1は濠の高まりの中心から西へ0.45m、濠の南の下端から南へ1.10m、柱穴2は中心から東へ0.20m、下端から南へ1.30m、柱

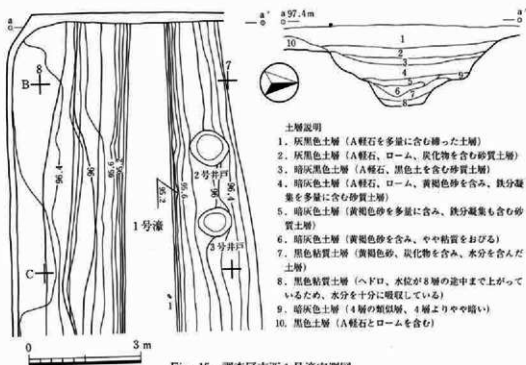


Fig. 15、調査区南西1号濠実測図

穴3は中心から東へ0.90m、下端から南へ0.90m、柱穴4は濠の高まりの中心線上で濠の南側の下端に位置し、柱穴5は濠の高まりの中心から西へ0.7m、濠の北の下端から北へ1.1m、柱穴6は中心から東へ1.0m、下端から北へ1.10m、柱穴7は中心から東へ1.10m、下端から北へ1.40mに位置する。各々の柱穴間の寸法は次の通りである。柱穴1～柱穴3は1.30m、柱穴5～柱穴7は1.80m、柱穴1～柱穴5は4.80m、柱穴3～柱穴7は3.90mである。尚、柱穴5及び柱穴7からは加工された柱材が出土している。柱穴1・3・5・7を結ぶと、5～6が1～3より広い台形となるが、これは土橋跡と考えられる。土橋跡の中心線から1号濠は東へ30.95m延びて北上し、J—1～0区で2号濠と結合する。濠の底面のレベルは2号濠が1号濠より25cm高く、水は2号濠から1号濠へ流れ込んだと推測される。以上の調査結果や他の濠とを検討すると、1号濠が本遺構の外郭をなす濠と考えられる。埋土状況は、底面を黒色の粘質土（ヘドロ）が覆い、その上層には砂を含んだ黒色粘質土が堆積し、順次レンズ状に埋土が堆積している。従って、本遺構には水がよどんでいたことが推測される。

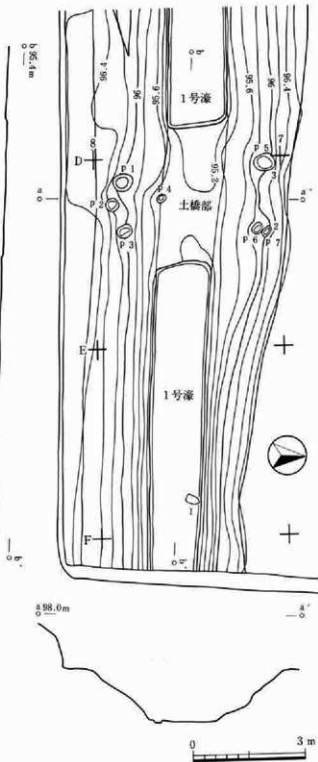


Fig. 16. 1号濠土橋跡部分等高線実測図と遺物出土状況実測図

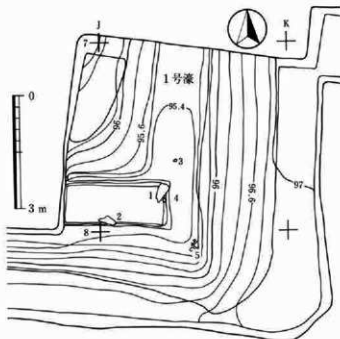


Fig. 17. 1号濠南東隅部分等高線実測図と遺物出土状況実測図

出土遺物

板 碑 (1-3)

1. (Fig.19-1, 17-1, P.L.11-1)

1号濠J-7区、床面から29cm上位の覆土内より出土した。塔身中央部から基部は欠損している。現存する長さ43.8cm、幅20cm、厚さ約2.3cmである。形状は頂部で山形を呈すが、二条線は無い。主尊種子はキリークが丸掘りされている。きわめて面は風化がすすんでおりその他は不明である。石材は緑泥片岩である。

2. (Fig.19-2, 17-2, P.L.11-2)

1号濠J-7区、床面より30cm上位の覆土内より出土した。塔身中位から基部にかけて欠損している。現存する長さ42.5cm、幅18.5cm、厚さ1.8cm。欠損は著しいが山形頂部は僅かに残る。表裏面とも磨耗がはげしく銘等の判読は不可能である。石材は緑泥片岩である。

3. (Fig.19-3, 16-1, P.L.11-3)

1号濠E-7区、床面より26cm上位の覆土内より出土した。塔身中位から頂部にかけて欠損している。現存する長さは45.1cm、幅は22.1cm、厚さ2.9cmである。柄の部分は粗雑な加工である。表裏面とも磨耗がはげしく銘等の判断は不可能である。裏面には石面に対しほぼ直角に鑿痕が整然と見られる。石材は緑泥片岩である。石材は1によく類似し同一個体の可能性もある。

陶 器

1. 寛、(Fig.20-1, 15-1, P.L.11-4)

大槩胴部の破片。1号濠C-7区床面より出土。胎土は石英粒を多量に含み長石も一部見られる。外面は酸化による灰赤色を呈す。格子状の叩き目が一部に残る。常滑産と考えられる。

2. 寛、(Fig.20-2, 17-3)

大槩胴部の破片。1号濠J-7区、床面上位30cmの覆土内より出土。胎土は長石、石英、黒色鉱物を含む。内面は紐つくり痕が残る。外面はオリーブ色の自然釉がかかっている。常滑産と考えられる。

3. かわらけ、(Fig.20-3, P.L.12-7)

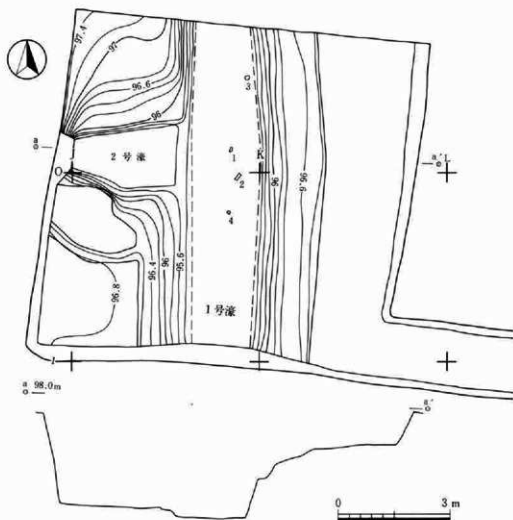


Fig. 18. 1・2号濠接点周辺実測図

J-0区覆土内出土。6分の1が現存する。口径13.7cm、底径6.5cm、器高3.1cmを推測できる。胎土は白色磁物を僅かに含む砂質土である。色調はにぶい橙、焼成は締っている。底部には左回転の糸切り痕が残る。

4. 砥石、(Fig.20-4, Fig.17-4, PL.11-5)

1号濠J-7区、床面より23cm上位の覆土内出土。長さ11.1cm、幅3.2cm、厚さ2.5cm重さ122.2g。使用による磨り減りで両端が薄い。片面には研ぎ時点での擦痕がある。凝灰岩。

5. 蓋、(Fig.20-5, 18-1, PL.12-6)

須恵器、1号濠J-1区床面上位11cmの覆土内出土。縁部は全部欠損、摘み部の径は5.5cm高さ0.6cmである。胎土は黒色磁物が混入。焼成は賢く焼き締っている。青灰色。秋間窯産。

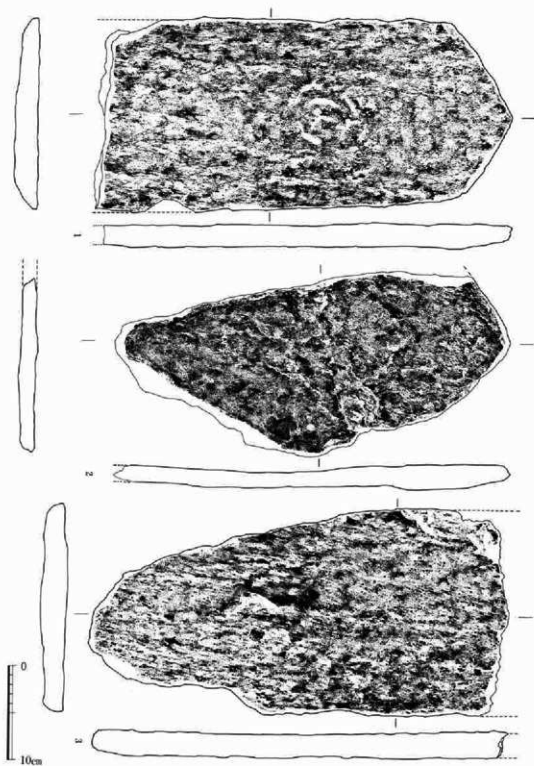


Fig.19、1号漆出土板碑实测图

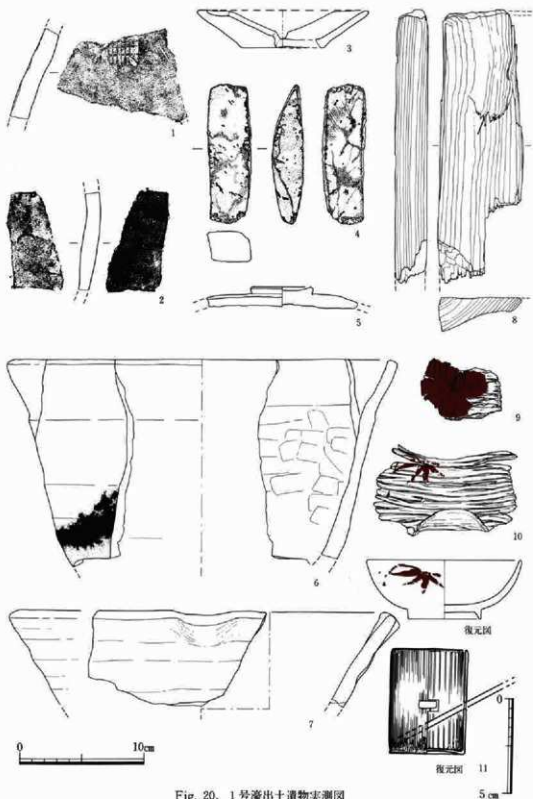


Fig. 20、1号濠出土遗物实测图

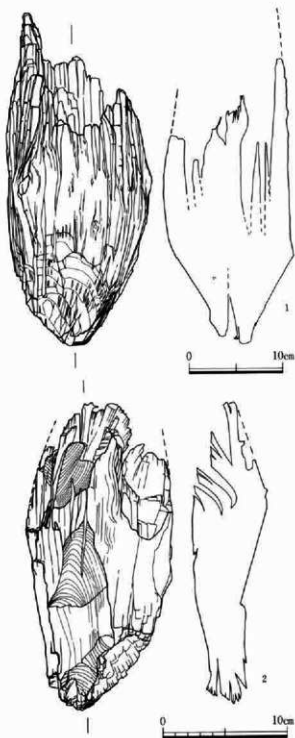


Fig. 21. 1号濠土橋使用杭柱実測図

6. 内耳鍋、(Fig.20—6, 17—5, P.L.12—2)

1号濠J—8区床面出土、行程残存、推定口径31cm。胎土には白、黒色粒が混入。色調は灰黒色、外面にすず付着。

7. 捏鉢、(Fig.20—7, 17—5, P.L.12—1)

6と同一地点で出土。口縁部の一部が残存。推定口径31cm。胎土には白、黒色粒子の他に小礫混入。灰黒色。

8. 木製品、(Fig.20—8, 18—2, P.L.12—5)。

1号濠J—0区、床面上位5cm覆土内出土。木口一面は切られているがその他不明。杉。

9. 10. 椀、(Fig.20—9・10, Fig.18—3, P.L.12—3・4)

1号濠J—1区床面上位12cm覆土内より出土。9は体部の一部であり地に赤漆文様に黒漆を使用。椀?。10は底部と体部の一部が残る黒地に赤漆で紫文様を描いている推定復元図作成。榿の木?。

11. 竹製杓、(Fig.20—11, 18—4, P.L.12—10)

1号濠J—0区、床面上位28cm覆土内より出土。出土時に破損、筒部が出土。高さ5.7cm、径約4cm、柄のとり付口は10×4mmが確認でき推定復元図作成。

橋脚材、(Fig.21—1・2, 16—2・3, P.L.12—8・9)

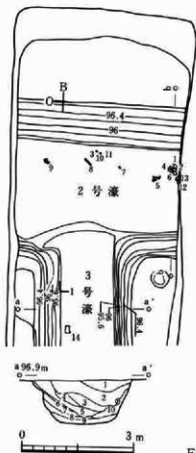
1号濠D—7区、P—5、P—7に残存した柱。太さ約12—15cmの丸太の先端を杭状に4面から切っている。1は黄蘗。2は唐檜類、松科唐檜属の一種。

2号濠 (Fig.18・22, P.L.10-2・13-1)

2号濠は、A・B-0、F-1-0、I-0、J-1-0区の範囲で検出された。調査区の北端に位置し、走向方位はN-86°Eであり、J-1-0区の地点で南北方向に走向する1号濠と交わり、更にA・B-0区で、南北方向に走向する3号濠と交わる。

調査された2号濠の規模は、全長(推定復元値を含む)44.40m、上端は西端部4.52m、中央部3.81m、1号濠との接点4.88m、下端は西端部2.62m、中央部2.26m、1号濠との接点1.79m、深さは1.30mである。底面は平坦であり、法面は南側が約55°、北側が約45°の傾斜をもち、底面・法面ともに、きれいに整形されている。

1号濠との接点は、他の部分より上端が広く、逆に下端は狭く、法面の傾斜もゆるやかになっており、法面の崩落がみられる。更に2号濠の底面は1号濠の底面より25cm高く、従って水は2号濠から1号濠へ流れ込むことが考えられる。3号濠との接点は、西側において中央部よりやや広がりを見せ、3号濠の底面が弧状形に2号濠内に入り込んでいる。両濠の底面のレベルは3号濠が高く、3号濠から2号濠へ流れ込んだことが推測される。又、濠の範囲は東側で1号濠との接点まで延び、西は調査区外へ延びる。



2号濠土層説明

1. 明灰黒色土層 (A軽石を含む砂質土層、一部根風をうける)
2. 灰黒色土層 (A軽石、黄褐色砂を含むやや締まった土層)
3. 灰黒色土層 (A軽石、黄褐色砂を含むやや締まった土層、2層より明るい)
4. 黄褐色砂層 (3層・5層のブロックが点在する。地山の黄褐色砂が主理土)
5. 灰黒色砂層 (A軽石と黄褐色砂及び炭化物を少量含む)
6. 灰褐色砂土層 (黄褐色砂と黒色土のブロックを多量に含む砂質土層)
7. 灰色砂土層 (地山の灰色白砂を含む砂質土層)
8. 黒色粘質土層 (黄褐色砂を少量含むへドロ状である)
9. 黒色粘質土層 (黄褐色砂を少量含むへドロ状である。8層より黒い)
10. 暗黒褐色土層 (黄褐色砂、ロームを含む)
11. 二次堆積ローム層 (暗褐色を呈する)

3号濠土層説明

1. 黒褐色土層 (A軽石、地山の灰褐色土を含む砂質土層)
2. 黒褐色土層 (A軽石を含み、地山の灰褐色土を多量に含む砂質土層)
3. 灰褐色砂層 (地山の灰褐色砂が主理土となったもの)
4. 灰褐色砂層 (地山の灰褐色砂に2層が混入している)
5. 3層と同じ
6. 灰黒褐色土層 (灰褐色砂を多量に含む砂質土層)
7. 暗灰褐色砂層 (3層と同じ灰褐色砂が8層により着色された土層)
8. 灰黒色土層 (灰褐色砂を含む砂質土層)
9. 灰黒色土層 (非常に粒子の細かい土層でへドロ状である)
10. 暗灰褐色砂層 (土質、含有成分は7層と同じだが、7層より明るい)

Fig. 22. 2・3号濠接点周辺実測図

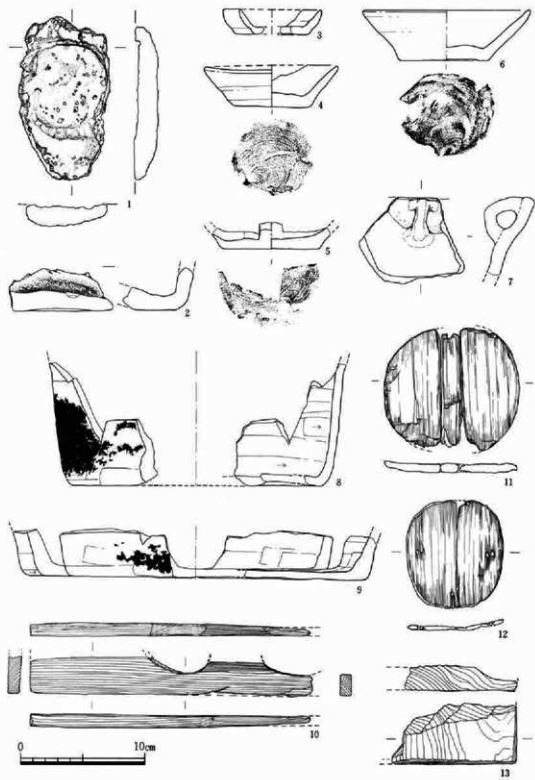


Fig. 23. 2号濠出土遺物実測図

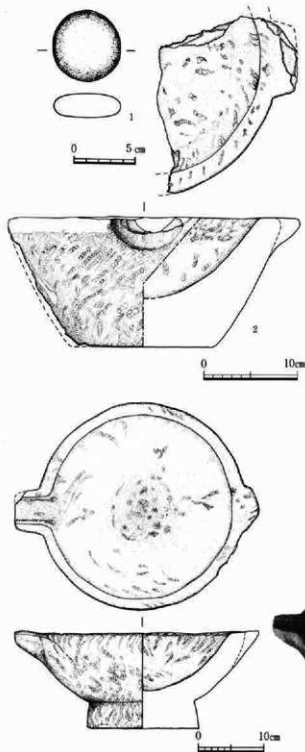


Fig 24、2号濠出土遺物実測図

出土遺物

鑄型 (1、2)

1. (Fig.23-1, 22-1, P.L.13-2)

2号濠B-0区、床面密着で出土。形状、用途等は不明。残存した状況から砂質でロームブロックや小礫を多量に含んでいる。何らかの底部と推定されるが、内面と思われる一部に円形に環と思われる小さな溝がある。外面は器面はあれがはげしい。黒褐色を呈す。

2. (Fig.23-2, 22-2, P.L.13-3)

1と同一地点で検出された。同一の胎土、色調である。底部から体部に立ち上がる部分の破片と思われる。

かわらけ (3-6)

3. (Fig.23-3, 22-3)

2号濠B-0区覆土内出土。写が残存し、大きさは推定で口径7.7cm、底径5.9cm、器高2.0cm。胎土は砂質であり、白色粒子が混入する。色調は灰



参考品 前橋市下東西遺跡 SE-39

白色である。底部には僅かであるが糸切り痕があり、左回転である。

4. (Fig.23-4, 22-4, P.L.13-7)

2号濠B-0区、床面上位5cmの覆土内より出土。片を欠損している。口径10.5cm、底径6.0cm、器高3.4cm。胎土は砂質土であり、黒色の小礫が混入している。焼成は良く、色調は灰白色である。底部には左回転による糸切り痕がある。

5. (Fig.23-5, 22-5, P.L.13-8)

2号濠B-0区床面より出土。底部片が残存し、底径は約8.0cmである。胎土は砂質であり、黒色粒子が混入している。色調は灰白色である。底部は左回転による糸切り痕がある。

6. (Fig.23-6, 22-6, P.L.14-1)

2号濠B-0区床面上位4cmの覆土内より出土。片を欠損。口径13.5cm、底径7.4cm、器高4.1cm。胎土は砂質で小礫を混入する。焼成は良く灰白色である。底部に左回転の糸切り痕がある。

内耳鍋 (7-9)

7. (Fig.23-7, 22-7, P.L.13-6)

2号濠B-0区床面上位2cmで出土。口縁部の破片、胎土は白色粒子を含む。焼成は良く、色調は黒色である。外面には煤が付着している。

8. (Fig.23-8, P.L.13-4)

2号濠B-0区覆土内より出土、片残存、深く、底部がほぼ平たい形状を呈す。胎土には小礫が混入。焼成は良く、器面には煤が付着している。黒褐色。

9. (Fig.23-9, P.L.13-5)

2号濠B-0区覆土内より出土、浅い焙烙状を呈す底部の破片である。胎土は白色、黒色粒子を含む。外面は丘状の凸凹があり内面に比して雑である。体部下位には煤が付着する。内面は横方向の撫で痕が残る。

木製品 (10-13)

10. (Fig.23-10, 22-8, P.L.14-5)

2号濠B-0区床面上位3.5cmの覆土内より出土。用途、形状不明。二ヶ所に弧状切り込みがある。この切り込みの角を丁寧に落している。櫓。

11. 曲物底板 (Fig.23-11, 22-9, P.L.14-2)

2号濠A-0区、床面上位4cm覆土内出土。直径約10.7cm、厚さ約0.6cm、榫目に板どりをしている。底板の周縁部は一部が受状をなす。櫓。

12. 曲物蓋 (Fig.23-12, 22-10, P.L.14-3)

2号濠B-0区、床面上位14cm覆土より出土。直径約8.5cm、厚さ約4mm。榫目に板どりをしている。蓋には1対の穴が3ヶ所に確認できる。各々の穴の径は約2mm前後である。櫓。

13. (Fig.23-13, 22-11, P.L.14-4)

2号濠B-0区。床面上位10cm、覆土内より出土。木端の可能性ある。厚さ1.8cm、片面は

年輪に沿ってはがれている。木口は片方に見られ、他方は段状に5段の切り口がある。杉。

石製品

1. 丸石 (Fig.24-1, 22-12, P.L.14-6)

2号濠B-0区、床面上位13cm覆土内より出土。長径5.4cm、厚さ1.9cm。擦痕はみられないが3号濠から同様の丸石が出土している。石材は砂岩である。

2. 石鉢 (Fig.24-2, 22-13, P.L.14-7)

2号濠B-0区覆土内より出土。欠残存。口径29.3cm、底径15.6cm、高さ13.9cm。底部は厚く口縁部に向い薄くなる。口唇部は平たく約2cmの厚さをもつ。口縁部には幅8cm×2cmの取っ手状の突出部がある。器面調整はのみ切り技法であり、3段階にのみ切りを行ない口縁部付近は磨かれている。

前橋市下東西遺跡SE39出土の石鉢を例に上げたが、この資料には台が付く。また口縁部の一方に片口状に突出部がある。当遺物も同様なもの可能性がある。内面は磨りへった部分がある。花崗岩。

3号濠 (Fig.22・25, P.L.13-1, 14-8)

3号濠はA-0～5、B-0～6区で検出され、調査区の西端で確認できた。調査区域外の西から東へ走向し、B-5区で屈曲、走向方位はN-2°-W、A・

- 土層説明
1. 灰黒色土層 (A群石を含む炭灰層、図では6層に分けられるが、概し共通を示すものである)
 2. 灰黒色土層 (B群石を含む砂質土層)
 3. 灰褐色土層 (A群石、地山の灰褐色砂を含む砂質土層)
 4. 灰黒色土層 (群石、地山の灰褐色砂、炭化物、小礫を含む砂質土層)
 5. 灰黒褐色土層 (地山の灰褐色砂を多量に含む)
 6. 灰褐色砂層 (地山の灰褐色砂層が土層土となったもの)
 7. 灰黒色土層 (地山の灰褐色砂層とA群石を含む砂質土層)
 8. 灰黒色土層 (中々粘質をおびた灰黒土とA群石を含む砂質土層)
 9. 灰黒色土層 (8層の類似土層、8層より湿気をおびている)
 10. 灰黒褐色土層 (9層と灰褐色砂層が互層の状態を示し、中粘性を帯びる)
 11. 灰黒色土層 (B群石、灰褐色砂層を含む)

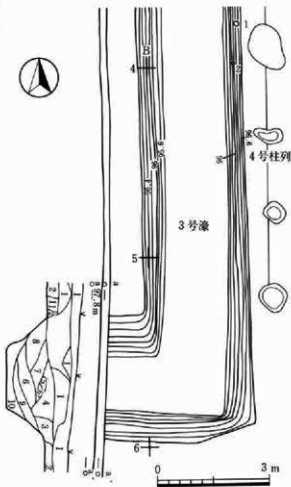


Fig. 25、3号濠南東隅等高線実測と土層図

B-0区で2号濠に接する。調査範囲内における規模は、東西走向の濠が2.5m、南北走向の濠が25.50m、上端が東西走向の濠の西端部3.33m、南北走向の濠の屈曲点2.86m、中央部2.74m、2号濠との接点2.62m、下端が西端部1.38m、南北走向の濠の屈曲点1.71m、中央部1.55m、2号濠との接点1.55m、深さが西端部1.22m、2号濠との接点1.12mを測る。底面は平坦で、法面の傾斜は東西走向の濠の南側で約50°、北側で約55°、2号濠との接点の西側で約60°、東側で約65°の傾斜をもち、底面・法面ともに整形されている。2号濠との接点の法面には、やや丸みが見られ、傾斜もややゆるやかな傾向にある。底面は2号濠内に弧状形に張り出しており、法面にレベル差が生じ、3号濠が2号濠へ流れ込む。本遺構の東には平行する形で4号柱列が存在する。北端、南側ともに濠の端までは延びていないが濠に関係する遺構と考えられる。

出土遺物

1. かわらけ (Fig.26-1, 25-1, P.L.15-1)

3号濠B-3区床面上位3cmより出土。一部欠損。口径12.8cm、底径6.7cm、器高3.7cm。胎土は砂質土で小礫を含む。焼成はややあまい。色調は淡黄色。底部には左回転の糸切り痕がある。

2. 丸石 (Fig.26-2, 25-2, P.L.15-2)

3号濠B-3区床面上位17cm覆土内より出土。長径5.9cm、厚さ1.5cm。擦痕はみられないが2号濠から同様の丸石が出土している。石材は頁岩（海の中に住む管状の化石を含む）。

3. 硯 (Fig.26-3, 22-14, P.L.15-3)

3号濠B-1区床面出土。約4欠損の長方硯である。幅は8.4cm、厚さ約1.6cm、長さは不明。

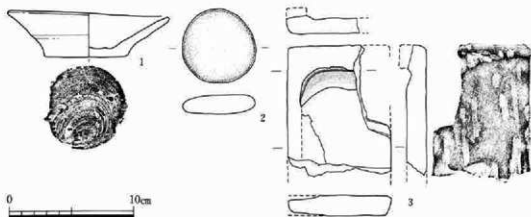


Fig. 26、3号濠出土遺物実測図

硯の裏面は幅0.6cmの工具痕が長軸方向に削り痕として残る。石材は頁岩と思われる。

4号濠 (Fig.27, P.L.8-1)

4号濠は、D・E・F・G-5-6、H-1-2・5-6、I-1-2・6区の範囲に1号濠の内側に平行して検出した。2号濠の南、3号濠の東に位置する。D-5-6区からH-6、I

—5区に至り、北へ屈曲し、調査区外まで延びる。4号濠の南壁の上端は3号濠の南側の
 上端の延長線上にあり、1号濠の土橋跡の中心から東1.7mの地点からはじまる。又、5
 号及び6号掘立柱建築遺構を破壊して掘削さ
 れている。走向方位は東西走向の濠でN—
 89°—W、南北走向の濠でN—2°—Eである。

規模は調査区内及び確認調査を含めて、濠

土層説明

1. 黒褐色土層 (浅間A軽石、黄褐色砂を含み、微乱が点在する)
2. 暗黒褐色土層 (浅間A軽石、黄褐色砂を含むやや砂質の土層)
3. 暗黒褐色土層 (浅間B軽石、黄褐色砂を含むやや砂質の土層、2層よりやや明るい)
4. 灰黒色土層 (黄褐色砂、小礫、浅間A軽石、黒色土を含む砂質土層)
5. 暗灰色土層 (黄褐色砂、浅間A軽石、鉄分凝集を含み、やや湿気をおびるが概して砂質である)
6. 灰黄色土層 (黄褐色砂、粒子を多量に含む砂質土層)
7. 暗灰色土層 (黄褐色砂、粒子を多量に含むやや粘性をおびる土層)
8. 灰黄色砂層 (黄褐色砂と小礫粒を含む土層)
9. 灰色土層 (8層の砂を少量含むが、やや粘性をおびる土層)
10. 暗灰色土層 (粘性をおびたヘドロ状の土層)
11. 黒褐色土層 (B軽石を含むやや砂質の土層—地山)
12. 暗黒褐色土層 (B軽石を多量に含む締まった土層、南横二子山古墳周縁の埋土と確定される)
13. 暗黒褐色土層 (B軽石を含む締まった土層)
14. 灰褐色土層 (黄褐色砂、B軽石を含む締まった土層)
15. 灰黒色土層 (灰黄色土、B軽石を含む締まった土層)
16. 灰黒色土層 (黄褐色砂と白色の浮石が露降り状に入っている締まった土層)
17. 灰褐色土層 (含有成分は15層と同じ、15層よりやや暗い)
18. 灰黒色土層 (黄褐色砂、B軽石を含む砂質土層)
19. 灰黒色土層 (黄褐色砂、17層のブロック、B軽石を含む砂質土層)
20. 灰褐色土層 (黄褐色砂、A軽石、黒色土を含む砂質土層)
21. 灰黒色土層 (黄褐色砂を含み、A軽石を多量に含む砂質土層)
22. 灰黒色土層 (黄褐色砂を含み、A軽石を含む、湿気が多いが砂質の土層)
23. 灰褐色土層 (黄褐色砂を多量に含む砂質土層)
24. 灰褐色土層 (黄褐色砂と砂を多量に含む砂質土層)
25. 灰褐色土層 (黄褐色砂を多量に含む砂質土層)

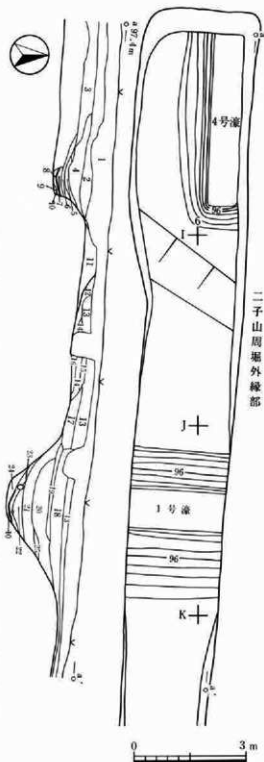


Fig. 27. 1・4号濠等高線実測と土層図

の長さは東西走向21.20m、南北走向21.90m以上であり、2号濠と交わるとすると約30mとなる。東西走向の濠の上端は西端部1.67m、東端部1.67m、南北走向の濠の上端はH-1区の南端部1.79m、北端部1.31m、東西走向の濠の下端は西端部0.90m、東端部1.07m、南北走向の濠の下端はH-1区の南端部1.00m、北端部1.00m、深さは0.85mである。掘削は2段に掘られ、上段は約40°、下段は約70°の傾斜をもつ。

H-6、I-5～6区の地点で、国指定史跡前橋二子山古墳の周堀を確認した。4号濠の屈曲部の東南約0.7mの地点で、N-37°-Eの方位で走向している。緩やかな東傾斜をなし、ローム層を0.3m程掘り、1号濠の南北走向の濠に切られている。当古墳の周堀の調査は確認調査で位置が明確になり、周堀の現状保存を最優先にするため、その調査は最小限にとどめた。

(細野雅男)

第4節 井戸

1号井戸 (Fig.28, P.L.15-4)

1号井戸は、E-3区で検出され、4号掘立柱建築遺構の南に位置する。規模は、上端0.9m×1m、下端0.6m×0.72m、深さ2mである。不整形円形プランをもち、底部はやや丸みをおびている。底部から0.5m程までは土砂で埋没していたが、この上約1mは、大小の河原石多数が土砂とともに埋められており、更にその上は、土砂が埋没していた。深さ約1.5mで出水し、水位の高さを思わせる。時期不明。

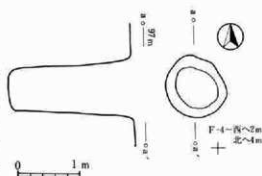


Fig. 28、1号井戸実測図

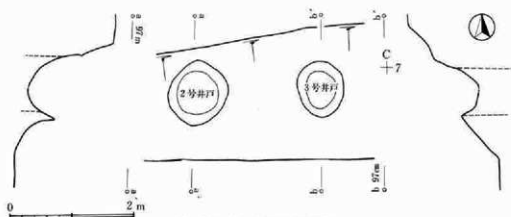


Fig. 29、2・3号井戸実測図

2号井戸 (Fig.29, P L. 8—2)

2号井戸は、B—7区で検出され、1号濠の北側の法面で、土橋跡の中心から西へ9.20mに位置する。規模は上端0.79m×1.06m、下端・深さともに不明である。不整形円形プランをもち、深さが0.5m程は土砂で埋没していたが、その下は大小の河原石が詰め込まれていた。時期不明。

3号井戸 (Fig.29, P L. 8—2)

3号井戸は、E—3区で検出され、2号井戸の東約2mに位置する。形状は上端0.72m×0.92m、下端・深さともに不明である。不整形のプランをもち、2号井戸同様に、上部は土砂で埋没し、その下は大小の河原石が多数詰め込まれていた。時期不明。 (細野雅男)

第5節 土 壙 (Fig.30)

土壙は一基のみであり、B—3区で検出された。3号濠の東で、1号掘立柱建築遺構の南西隅に位置する。本遺構の西半部のほぼ中央に1号掘立柱建築遺構の南西隅にあたる柱穴が存在する。主軸方位はN—89°—Wで、規模は上端の0.92m×1.70m、下端0.76m×1.5m、深さが0.12mを測る。隅丸の長方形プランをもち、底面はゆるやかな東傾斜である。時期不明。

(細野雅男)

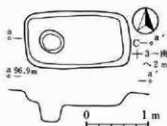


Fig. 30、土壙実測図

第6章 ま と め

県立文書館遺跡の埋蔵文化財発掘調査において、濠、掘立柱建築遺構、柱列、井戸、土塼及び東に隣接する国指定史跡で前方後円墳である前橋二子山古墳の前方部の周堀の一部を検出した。検出した遺構の概要は下記の如くである。

1. 濠について

濠の規模と概要

遺構 番号	規 模				走 向 方 位	概 要
	全 長	上 幅	下 幅	深 さ		
1	82.90	4.05 ～ 4.52	1.05 ～ 1.55	1.55	E-4°-S N-3°-E	調査区の南端と東端に位置し、調査区外北と西方向に延びる。居館跡の外濠と推定。濠の形状は二段堀であり、土橋跡がある。
2	44.40	3.81 ～ 4.88	1.79 ～ 2.62	1.30	N-86°-E	調査区北端部に存在し、北東部で1号濠に接する。西側調査区外に濠は延びるため全貌は不明。
3	28.00	2.62 ～ 3.33	1.38 ～ 1.71	1.12 ～ 1.22	? N-2°-W	調査区西端に位置している。北側は2号濠に接する。西側は調査区外に延び全貌は不明。4号柱列が伴うものと考えられる。
4	43.10	1.31 ～ 1.79	0.90 ～ 1.07	0.85	N-89°-W N-2°-E	調査区東半部に位置し、1号濠の内側6mに平行した走向をもつ。内濠の可能性も考えられる。

※全長は本調査及び確認調査で検出された数値。単位：m

濠は4条検出され、1号濠は調査区域の南端を東西方向に走向し、屈曲して北上する。北及び西の調査区域外へ延び、検出された4条の内で最大規模をもち、土橋跡も確認され、本遺構の外周をなすと考えられる。2号濠は西の調査区域外から東に走向し、1号濠に結合する。底面・法面ともに整形され、1号～3号濠はその底面のレベル差により、2号濠は1号濠へ、3号濠は2号濠へ流れ込むと推定される。3号濠は、1号、2号濠同様に、西の調査区域外から東に走向し、屈曲して北上、2号濠と結合する。4号濠は土橋跡の東に位置し、1号濠と平行走向し、2号濠と結合するものと推定される。また1号濠と4号濠の位置関係は、ほとんど東西、南北走向の方位は一致し、濠間の空間は約6mの間隔である。このことから1号濠土橋跡部東側は二重の濠により区画されている可能性がある。一方、2号濠は1・4号濠とは方位的にずれがあり、3号濠は1・4号濠と2号濠のずれの中間にある。これらの状況から全体の様相を復元することは不可能であり、西、北に性格を明らかにする鍵があろう。

2. 掘立柱建築遺構について

掘立柱建築遺構の規模と概略

単位：m

遺構番号	梁間×桁行	柱間の寸法		主軸方位及び概要
		梁間	桁行	
1号	5間×1間(南) 4間×1間(北)	1.88—1.90—2.84—1.80—1.88(南) 3.84—2.60—2.02—1.84(北)	3.70	N—87°—W 2号の建替
2号	4間×1間(南) 3間×1間(北)	2.04—1.86—2.90—1.82(南) 4.02—2.76—1.84(北)	3.68	N—88°—W
3号	2間×1間	1.80—1.80	3.66	N—86°—W
4号	5間?×1間	2.36—2.36—2.30—2.37—?	5.15	N—83°—E
5号	(3間×3間(南) 3間×4間(推定) 3間×3間(北) 3間×4間(推定))	1.72—2.00—1.82	3.48—1.80—2.48	N—3°—E
		1.88—1.76—0.90—1.00	1.74—1.74—1.80—2.48(推定)	総柱建物
6号	3間×2間 3間×3間(推定)	1.86—1.78—1.68	2.92—1.49 1.46—1.45—1.49(推定)	N—3°—E 総柱建物 5号の建替

1号掘立柱建築遺構は、2号掘立柱建築遺構を建替え、西へ1間拡張し、5号掘立柱建築遺構も、6号掘立柱建築遺構を建替え、北へ1間拡張したものと推定される。1号・2号・3号・4号掘立柱建築遺構は、主軸方位がN—83°—W—N—88°—Wであり5号・6号掘立柱建築遺構はN—3°—Eである。長辺、短辺の相違はあるが、掘立柱建築遺構の軸はほぼ一致している。4号掘立柱建築遺構は1号及び2号掘立柱建築遺構と重複しており、4号掘立柱建築遺構が新しい時期の遺構である。

3. 柱列について

柱列の規模と概要

単位：m

遺構番号	間数	柱間の寸法	主軸方位	概要
1号	3間	2.87—1.92—2.10	N—85°—W	1号、2号掘立柱建築遺構の南、平行
2号	3間	3.85—2.30—2.32	N—87°—E	4号掘立柱建築遺構の北、平行
3号	5間	2.03—1.88—2.03—1.93—2.68	N—82°—E	4号掘立柱建築遺構の北、平行
4号	7間	2.14—2.18—1.80—3.60—2.50—1.96—2.34	N—3°—W	3号家の東、ほぼ平行

1号柱列は、1号及び2号掘立柱建築遺構の南に位置し、両遺構と平行する。東端が両遺構とほぼ一致する。1号及び2号掘立柱建築遺構に付属する遺構と推定される。2号柱列は、4号掘立柱建築遺構の北に位置し、平行する。北端は4号掘立柱建築遺構よりやや北から始まり、途中までである。3号柱列は、4号掘立柱建築遺構及び2号柱列の北に位置し、両遺構と平行する。北端は両遺構よりやや北から始まる。3号柱列同様、4号掘立柱建築遺構と関係する遺構と推定される。4号柱列は、検出された柱列中、最も規模が大きく、3号濠の東に位置し、ほぼ平行であり、3号濠に關係する遺構と推定される。1号～3号柱列は建物に、4号柱列は濠に關係する遺構と推定される。

4. 井戸及び土壌について

井戸は3基検出され、1号井戸は4号掘立柱建築遺構の南、2号及び3号井戸は、1号濠の北法面で、土橋跡の西に位置する。プランは円形であり、遺物の出土がなく、時期も不明である。土壌は1号掘立柱建築遺構の南西隅に位置し、隅丸長方形のプランをもち、遺物の出土がなく、時期も不明である。

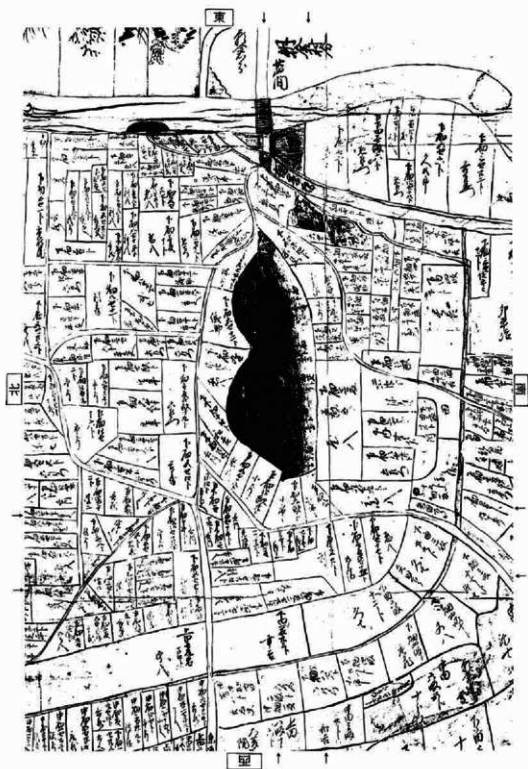
県立文書館遺跡は、濠と掘立柱建築遺構、柱列及び井戸からなる遺跡であり、居館跡と推定される。1号及び5号掘立柱建築遺構は、2号及び6号掘立柱建築遺構を代替えたものと考えたと2号及び6号掘立柱建築遺構よりも、1号及び5号掘立柱建築遺構が新しい時期の遺構と推定される。3号掘立柱建築遺構は、1号及び2号、5号及び6号掘立柱建築遺構と同時期の遺構と推定される。4号掘立柱建築遺構は、1号及び2号掘立柱建築遺構との重複関係により、検出された6棟の掘立柱建築遺構中、最も新しい時期に比定されよう。柱列は、1号が1号及び2号掘立柱建築遺構と同時期、2号及び3号が4号掘立柱建築遺構と同時期と比定されるものであろう。井戸は遺物の出土がないため、正確な時期の比定は困難であるが、本遺構に關係するものと考え、居館跡の存在した時期に比定しえよう。

出土遺物は居館跡の1・2・3号濠からである。1号濠出土の板碑 (Fig.19-1) の特徴であるキリクが丸掘りて小型化され、蓮座は簡略化、頭の二条線が無いところ等から時期は14世紀末～16世紀初頭につくられたと推定できる。出土状況は投げ込まれた状況である。1～3号濠のかわらけは全部白っぽい流が特色であり、大江編年¹⁾群馬県例B系列、D系列の15世紀後半から16世紀にかけてに比定できる。井上編年²⁾による中世近世の土器による内耳鍋、捏鉢、かわらけの分類では4期の範疇に比定することができる。調査において濠の新旧関係は明確ではない。少量の遺物の比定から当該遺跡の時期は15世紀後半から16世紀にかけて存在した可能性がある。

(細野雅男)

注1 大江正行 「群馬県と周辺地域の中世土師質土器」 群馬考古通信7 1980年

2 井上 太 「中世・近世の土器について」 本宿・郷土遺跡発掘調査報告書 富岡市教育委員会 1981年



付 図 前橋二子山古墳周辺の絵図（原図の3分の1）、一印内が調査区
 （御絵図東通り天川村、安政6己未年2月 前橋市文京町大屋基一氏保管）

圖 版



前橋二子山古墳と調査区全景（空撮）



1. 確認調査第1トレンチ周囲立ち上がり状況



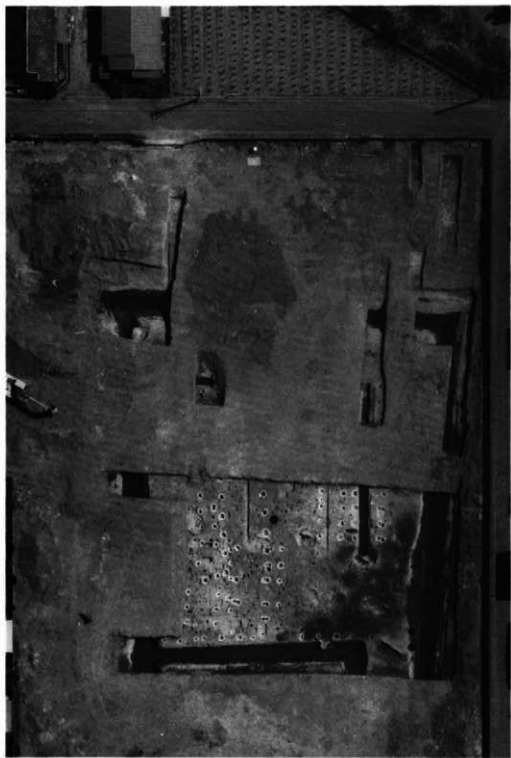
2. 確認調査第3トレンチ周囲立ち上がり状況



1 ▶ 確認調査第4トレンチ土層堆積状況

2 確認調査第5トレンチ土層堆積状況 ▼





調査区全景（空撮）



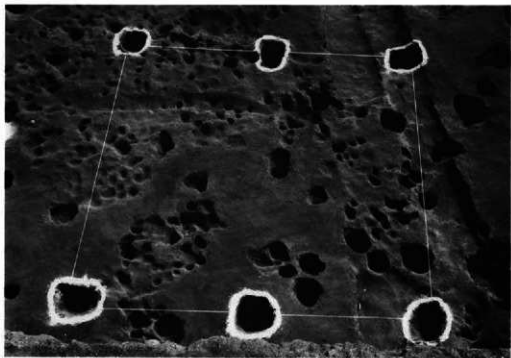
1. 1号柱列、1・2号掘立柱建築遺構全景（東）



2. 2・3号柱列、4号掘立柱建築遺構（東）



1. 4号柱列全景(北)



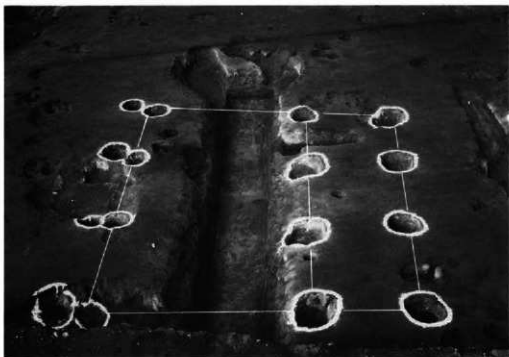
2. 3号掘立柱建筑遺構全景(北)



1. 4号掘立柱建筑遺構（北）



2. 5・6号掘立柱建筑遺構全景、4号濠西端部（北）



1. 6号掘立柱建築遺構全景、4号濠(東)



2. 2・3号井戸、1号濠(西)



1. 1号濠土桥跨部分(西)



2. 1号濠土桥跨柱出土状况(西)



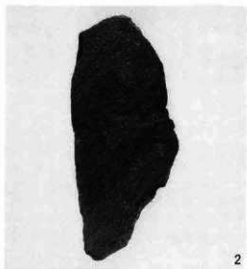
1. 1号溝南東隅部遺物出土状況(北)



2. 1・2号溝接点付近の遺物出土状況(南)



1



2



3

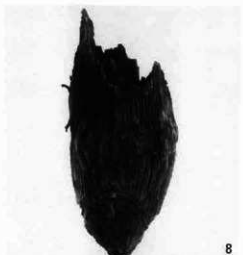


4



5

1-5. 1号濠出土遺物



1-7. 1号濠出土遺物
8, 9. 1号濠土構柱使用材
10. 1号濠竹製杓出土状況



1. 2・3号濠接点付近遺物出土状況（北）



2



3



4



5



6

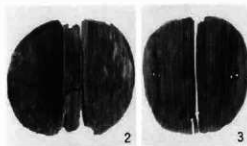


7



8

2～8. 2号濠出土遺物



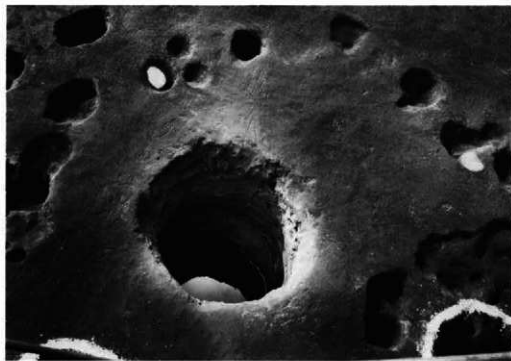
1-7. 2号濠出土遺物



8. 3号濠全景 (北)



1-3. 3号塚出土遺物



4. 1号井戸全景(南)

県立文書館遺跡

県立文書館建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 昭和59年11月30日

編集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784-2

TEL. 0279-52-2511

発行 群馬県考古資料普及会
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784-2

TEL. 0279-52-2511

印刷 株式会社 前橋印刷所
